
華の天使 月の精霊

汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華の天使 月の精霊

【Nコード】

N4931F

【作者名】

汐

【あらすじ】

華が咲き、風が吹き、華が舞う。そこに居るのは1人の少女。苦難の日々も記憶を頼りに生き続けた。遠い日のあなたに出会える日を夢見て…。悲しい記憶を持つ人よ。忘れてしまったのですか…。悲しみと寂しさは涙にせず心の底へ。あなたが今幸せなら。それが私の幸せになるから。私は今日も笑顔になれるのです。

1・忘れた過去と記憶（前書き）

前の連載とは大きく変えたいと思います。^^
明るく・面白く・読みやすくを目標にして
頑張ります！

1・忘れた過去と記憶

目に浮かぶのは1人の少女

いつも隣にいてくれた。君は僕の生きる証だった。

大切に大切に、ずっと傍にいたかった。

淡い桜色の髪。大きな紅い瞳。微笑んだ表情がとても可愛くて、
ひたむきで無垢な心には何度も助けられたんだ。
ずっとときみを守っていきたいと心から願ったよ。

君は誇り高い『華』だから。僕の憧れだったから。
下を見ないで。空を見上げて欲しかった。

遠い遠い綺麗な蒼い空に

キミの目指すものが絶対あるから

「…うつん。違うよ。キミだけ…君だけがいればいいの。」

春の華。満開に咲き誇る頃。

少女の言葉が、揺れる春の空に木霊した

*

*

夜を越え新しい太陽が生まれ、暖かい光が地上に射した。
綺麗な空。透き通った空気。爽やかな風が吹き渡る…

「んー。いい朝だなー！」

・・・

「っていつか！ここどこだ！！！」

青年は広がる草原に倒れていた体を起きあげ、不意に叫ぶ。
だがそれは仕方ない。

誰だってそんな状況になったら気が動転するだろう。

ここは思っていた世界…自分がいるはずだと思っていた場所とは
全く違う景色だった。

青年は、はっとして辺りを見渡す。見たこともない風景に戸惑い
を隠せない。

「…あの雲 カレーに似てんな。」

・・・？

彼は現実逃避をしているのだろうか。

「あはは！！ あれ ぜってークラゲにみえる！」

1人で異常な盛り上がりっぷりを見せている。

雲は絶対クラゲには見えない。

何が可笑しいのか、幸せそうに笑っている。

ここまでで分かると思うが、この青年はかなり変っているようだ。
一般人は異国に突然来てこの行動はしないと思われる。（そんな
シュチュエーション滅多にないと思うが・・・）

青年はしばらく1人遊びを続けた。2時間経過・・・あきないの
だろうか。

そして、充分1人遊びを満喫したのか背伸びをして、今度は真剣に悩み始めた。

瞳は真剣そのものである。先ほどの表情とは似つかない表情だ。やはり先程の態度は、いきなりの事に頭が混乱していたのだろう。

「今日の昼メシはどうすっかな…」

前言撤回！彼は平常がこれらしい。

それにしても、どうでもいい事を考えてるんだな…。

彼はメニューが決まったのか、ポンと手をおいた。

「よし！」

と気合をいれて遠くに見える街に向かって歩き出した。

その足取りは軽く少年のような姿だった。

順応性があるのか、もうこの世界で暮らそうと準備をしていた。その前に、腹ごしらえらしいが…。（こんな主人公で真に申し訳ない）

彼は賑わっている市場に着いて、買い物をしていた。

「あれだな。今日はカレーとごはんだな…っと あ そつか…ここ米栽培してねえのかよ」

あいたーとも思うように額に手をおいた。

余程落ち込んでいる姿から、彼は米好きらしい。

そう、今彼は言葉も通じない国で、堂々と買い物をしている。

誰からか貰ったの！？手提げのエコバッグをもっている。

そのバッグにはジャガイモ ニンジンなどカレーに使う材料が入っていた。

着々と集めているらしいが…。

どうやって買い物をしたのだろう？

次にカレー粉を買おうとしていた。

買い物方法は、ジェスチャーで見事にコミュニケーションをとって、見事に値切る事にも成功していた！店の主人もキミには負けたよ…みたいな表情をしている。（どんな主人だ・・・）

するとこの世界では使えないだろう通貨なのに、ポケットから平気で代金として渡した！

それは無理だろうと誰もが思う瞬間…。

主人はコインをしばらく眺め、瞳を光らせた…緊張感が漂う…。

運が悪ければ、警察行きなのでは・・・？

払った本人ではなく、その状況を見ていた野次馬達が冷や汗をかく…。
おいおい！

「* @ ; + ! !」（まいど！！）

営業用？にこやかスマイル

店の主人、いいのですか、それで…。

「　　」

彼はじゃがいもをナイフで切っていた。

目的通りカレー作りは達成されている。

彼は以外に器用で、料理の腕も中々の様だ。

りんごも兎ちゃんにしている。

カレーに使うのだとしたら、意味無いと思われる。

「どこで料理してんじゃ！」という人もいるだろう。

お答えしよう。ここはどこかというところとキャンプ場である。

現在、彼はキャンプ場を借りて生活しようとしていた。（それは駄目ではないのだろうか・・・）

「バイトも始めねえとな…」

野菜を切り終え、焔炉に火をつける。彼はふうとため息をついた。ちよつと落ち込み気味の

姿は、先ほどの時から元気だったのかと思わせるぐらいだ。

彼は共同の洗い場で料理をしているのだが、少し離れた所に5、6人の女性が

彼を見ている。

視線に気付かない彼。

女性達はこのキャンプに泊まろうとしている友達同士らしい。じ〜。

女性達の目に映る彼の姿は、さらさらの黒髪、鋭い瞳、高くすらっとした体型。

少し複雑な事情をもって苦勞をしている青年に見えるらしい。

まあ、あながち嘘ではないが…。

「やっぱ、米は売ってなかったなあ…これで、米があればぜってえうまいのになあ…ま 仕方ない か、今は我慢だな。」

異国に来て初めて後悔している言葉、なんて情けないだろう。

しかし彼の言葉はもちろん彼女達には分からない。

「#<@~:~*」（人生に悩み耽^{ふけ}っている所がかっこいい）

これこそ知らぬが仏である。

彼に惚れてしまった、行動派の女性1名が、青年の近くに接近！！

「+*」（あの…）

「ん？」

青年はカレーをプラスチックの皿（キャンプ場で借りたもの）に自分の分を盛り付けていた。（特盛り！） 彼は痩せている割に大食いらしい。

彼は近づいた女性を見て、

「ああ。はら減ってんのか。」

彼はお皿に盛り付けスプーンもつけて、女性に渡した。

下心はないらしく善意らしい。

「?」

思わず受け取ってしまった女性は

ぺこつとお辞儀をした。その姿を見た青年は屈託のない笑顔を見せた。

「厳しくてもホームレスとしてお互い頑張ろうな！」ぐつと親指を立てる。勘違い

「！！！」

笑顔もまたかっこいい！

えつと、彼の国の挨拶では親指を立てて挨拶するのかしら…でも返さなかったら失礼よねっ！

「＃\$！」（ありがとうございます！）親指を立てる！俊足で走り去る。（何故？）

「おー！はえーな」

俊足の彼女を見て、呟いた。

（この国でもホームレスっているんだな…よし！俺もがんばろう！）勘違い

彼は心の中で呟いた。

*

*

へえー。バンガローって以外と広いじゃん。
ランプをつけて、布団を敷いてつと。

ふあゝ。なんか今日色々あったなあ…。疲れたぜよー。

バイト探さなきゃな…金もやばいしな。

でも、本当にポケットに金が入ってて良かったな…。すっげーラッキーー。

俺って何しに来たんだ…？ここまで来てまで。

何か忘れてる気がすんだよなあ…。ま っ つか。

彼に出会うため。

桜吹雪が舞い 華の天使が舞い降りる…

1・忘れた過去と記憶（後書き）

お読み下さってありがとうございます!!

謎が多い物語になると思います。

ですが、読みやすい文章で書けるよう頑張ります。

華天使は次回登場します。

2・桜の少女

青白い霧に包まれた世界。そこには白い花が咲き乱れている。
微かな風が辺りを吹き渡り、風に揺れる小さな花を、月は照らしていた。

水は一切濁りがなく、月を映し出していた。

湖に映る月はとても美しく

空に光る月は神々しい光を放っている。この世界にあるのは静寂と悲しみ。

その気持ちを唄う1人の少女。

長く真っ直ぐな蒼い髪。月に照らされると透けて光り綺麗な水色となる。

長く細い髪は風にさらさら靡いてる。彼女の瞳は紺と空色のグラデーションのような色で、

瞳はすぐに涙をながせそうなるうるの瞳。潤いのあるピンク色の唇は、微かに動き

音を紡いでいる。深き悲しみの詞を歌い、音色は声でないような癖の無い透き通った音。

風に音をのせて、響き渡る。遠い遠い空に向けて

*

*

ぽかぽかと暖かいバンガローの中で青年は目を覚ました。

「ふあ〜っと」

起き上がって欠伸をする。布団から体を離し、軽い準備運動をする。

「今日は待ちに待った体育祭だぜ！」

彼は寝ぼけているらしい。ここが異国の事は忘れていたようだ。

「玉入れ頑張んぞ〜」

その年になつて、その競技があるのだろうか？

声が親父っぽいすな。個人種目で一番をとってやるぜ！というのならまだ分かるのだが…

「…ん？なんだこれ！！」

彼は目を丸くした。おや、やっと気付いたらしい。自分がどんな状況にいるのかが。

「テレビがあんじゃん！」

そこなのか！というかやっとな気付いたのか！中々大きいサイズのテレビなのだが。

「ラッキー」

そう言つて彼はテレビのスイッチをいれる。ポチツとな。分かりもしない言葉が次々に耳に入る。 「・・・」

彼はテレビのチャンネルを持ったまま、呆然としている。

「あ そつか…俺。」

下を向き俯く。

「帰国静雄だったんだ…」

それをいうなら帰国子女。あとキミはそんな設定では無いです。

「これから頑張んねえとな…」

彼は表情を暗くして、声のトーンを低くして呟いた。

「おれ、帰国静雄しずおとして生きてくよ…」

故に！そんな必要はないよ！というか静雄って誰だ

！

*

*

「よっこらせっ」

彼はバイト先を見つけたようだ。話も通じないのによく雇われたなあ…

肝心のその仕事は…

「どうぞ。手紙っす。」

郵便屋だった！この国では排出ガスをできるだけ出さないように車がない。道路も無い。ほとんどの人は歩きか1輪車らしい…。

自転車は無いのだろうか。

それに携帯電話も普及していない為、手紙で相手に伝えるらしい。彼の今日のお届けする手紙は白い袋にどっさり入っている。

その量ははんぱない数だ。

彼はその袋を担いで走っている。

常人だったら歩くことで精一杯だろう。

彼の大きな白い袋をもって走っている姿が、冬のあの人を連想させる。

ヒント！煙突から不法侵入するあのお方ですヨ

「次は…東区2丁めか」

そして彼は軽くスルーして走り出した。

「ふー」

鼻歌を歌いながら彼は走っている。もちろん郵便屋は彼の他にもたくさんいる。

この国での郵便屋は持久力と地理能力が無いと駄目らしい。

「この分かれ道どっちだっけな…」

彼は分かれ道に遭遇した！

1つは今までと同じような街が続いている道。

もう1つは薄暗い森への道…狼の遠吠えも聞こえてくる。子供だ

ってわかるさ！

大丈夫大丈夫… ってええ！あいつ森の方向へ走っていった！なぜだ　　っ

彼は方向音痴らしい　　っ！

「ん？何か聞こえたような。」

…気のせいですよ　やっと追いつきました。ふう。

彼は今まで通り何の迷いもなく森の奥深くへと進んでいる。ふくろうの声も聞こえてくる。

「ん　ミスったか？」

あはは。ちよつと遅いつすね。

彼は後ろを振り向く。

「！？」

彼は驚きを隠せない。

なぜなら、ずっと一本の道しか通っていなかったのに、後ろを振り返ると5つに道が分かれていたからだ。

心臓がどんどん早まる。

彼は現実を知る。

自分はこの森で迷ってしまった。

ここから出る事が出来るのだろうか。

不安が心をよぎる。

「どうなつてんだ？　これ。」

ナレーションとは裏腹に彼は平然としている…おいおい。

彼の苦痛な叫び声と同時にもう1つの声が聞こえた。

「？　俺。叫び声なんて…」（強制終了）

「郵便屋さん…こんばんは」

彼が声の方向へ体を向けると、桜吹雪が舞っていた。桜の木なんてどこにもないのに。

目の前には1人の少女。

桜色の髪がとても綺麗で、紅い瞳によく栄える。

大きい瞳を彼に向け、にっこり笑って彼を見る。

彼はその笑顔に見覚えがあった。

遠い記憶にあるあの子。その子がいたから今…

「お手紙…貰えませんか？」

大人っぽく、可愛い澄んだ声。その声には彼は体をびくつとさせた。自分より随分背の低い少女がてこと自分に近づいてきた。

上目遣いで少女は彼をじっと見つめる。

綺麗な顔に青年の心が少し揺れる。

「…あの子、手紙っていつてもさ。キミ宛の無いんじゃない？」

そう言いながら、彼は袋から多数の手紙を出した。

その中からこの子宛のを探しだした。

「キミ 名前は？」

ちらつと少女を見る。少女は、はにかみながら視線を青年に向けた。

「当ててみて下さいっ」

「へ？」

「えへへ」

初対面の相手に自分の名前を当てさせるなんて…。

こ、小悪魔！？（馬鹿）

だが、言葉とは正反対に天使のような無邪気な笑顔を浮かべている。

その笑顔に逆らえない彼。

「……（汗）」

すっかりペースを狂わされたらしい。

「ん そうだな・・・。」
にここにしながら待っている少女。

「ん 。」にここに^^

「ん 。」にここに^^

4時間後：

「：負けました。スイマセン。」

ついに青年は諦めた。ふうとため息が漏れる。

「謝らないで下さい！：ですが、あの何か浮かびませんか？」
めげてない少女。

「：そんなに聞きたいの？」

冷え切った目で少女を見つめる。

自分の名前を当ててもらいたいなんて、不思議な子だな！。と思
いながら。

「はいっ！聞きたいです」

まだまだ元気な少女。諦めが悪いのか、粘り強いのか。

「じゃ：は」

「花子はちよつと手抜きです」

青年は肩を落とした。

「：予知能力？」

「はい」

「：へー。すげーな。」

その後、彼は腕を組んで本気で悩み出した。

名前：名前：。名前：？彼は身震いをした。

何かの呪縛から解放されたように、自分を取り戻し、当たり前
の事に気付いた。

彼は彼自身の名前を忘れてしまっていた。
住んでいた所も：。

覚えている記憶は、この異国に来てから。

そんな青ざめた青年の表情を少女は見ていた。不思議そうに悲しそうな表情で…

彼の様子がおかしかった。震えていて血の気がないぐらい白い顔。

「…何なんだよ。」

彼は手を力一杯握り締めた。

「何でだよ…。」

青年の瞳から涙が流れた。

その時、白い小さな手が彼の拳に触れた。

「…何」

触れた手を反射的に離し、彼は少女の顔を見た。

少女は切ない表情を浮かべていた。

「俺…何してんだろ。」

小さく彼は呟いて、手で目を擦った。

「何か変なところ見せたな…ゴメンな。」

彼は精一杯の笑顔で話しかけた。

「何か俺おかしいんだ。記憶も何も無いしさ。何でここに居たかも分かんないしさ…もうどうすりゃいいって話だよな！」

彼は一人話し続ける。

「…ふ、はははっ」

彼は感情が堪えきれずに、吹き出すように笑った。

「…って何言ってたんだ。俺。初対面の子にさ。」

空元気になって、へへつと笑った。

彼は取り乱した事を無くしたいようだった。

軽く彼は自己嫌悪をしながら、青年は下を俯いた。

微妙な空気が2人の間に流れる…。

その空気を遮る様に少女は口を開いた。

「その気持ち…分かるような気がします。」

少女の言葉に青年は顔を上げた。

自分の不確かで分けの分からない気持ちが理解…共感してもらえると、思いもしなかったから。

「不安も…もどかしさも全部解決します。大丈夫です。…大丈夫ですよ。」

青年を落ち着かせるように優しく言った。

「え…と。実は」

少女は照れながら指を動かして、挙動不審に言った。

「私…こう見えても未来予知能力と過去透視能力があるのです…
っ！」

「へ？」

突然の言葉。

そんな力って存在するのか？と彼は思った。

でも、まあ今俺がここにいる事だって不思議なわけだしなあ…。

彼は少し驚きながら、精一杯に話す少女の姿が面白くて、ふっと笑った。

その後青年は、頭を掻きながら笑って言った。

「へえ、マジで。」

こくこくと少女は頷く。

「何か…サンキュ。元気付けてくれてんだろ。」

「あ……。」

「お前の透視能力で見えるような未来になってっといいいけどな」

青年の自然な笑顔に少女は心が動いた。

でも少女には分かる、青年の心が暗闇に堕ちているのを。

自然のような、無理している笑顔。他人に隠している心を。

救いたかった…君の心を

「…私は分かるのです…っ！あなたのお名前を。あなたが誰なのかも。」

何かを伝えたい事があるのか、早口になりながら必死に喋りだした。

「記憶は…ゆっくり思い出せばいいと思います。」

少女の綺麗な紅い瞳に涙が溜まる。

何故そんなに、彼に構うのだろう。

「焦りは禁物です…。」

跪いている彼の頭を少女は撫でていた。

優しく…愛しく…。

この子の存在は昔から心の支えだった。

青年は幼い頃に戻ったように、少女に強く抱きしめられていた。

「え…」

「…あなたのお役に立ちたいです。」

2・桜の少女（後書き）

お読み下さっておりがとうございます!!
次回は蒼い髪の女の子が出ます。

3・月光と華音

少女が青年を抱きしめている。

青年は咄嗟の少女の行動に驚きの表情を隠せない。

声も出せずに、時間は経つ。

少女が居るからだろうか、この森に綺麗な桃色の花が咲き乱れている。

風が吹き、花が揺れ、桜吹雪が舞う。その景色は息を呑む程美しかった。

単なる偶然なのか、それとも必然だろうか。2人が出会ったのは。

「華人様^{はなびと}：！ 何をなされているのですか？」

急に響く、透き通った綺麗な声。だがその声は少女の声ではない。少女の声より、大人びた声：年上のようだ。

その言葉を聞いた少女は、体をびくつとさせ、青年から体を離れた。

「ふう…。やっと解放」

少女から解放されてやっと声を出した。

顔は赤く、呼吸が荒い。急な展開に汗をかいたらしい。

「焦りました。華人様を見失って…。」

その声の持ち主は、蒼い髪の少女。少女といっても桜色の髪の少女よりは背が高く、外見年齢は15歳ぐらいである。

瞳は紺と空色のグラデーションで、長く細い髪が風に揺れている。細く白い体。意志の強い瞳。整った顔立ち。

桜色の髪の少女と並ぶと、美少女が2人。

このままユニット組んだら絶対売れよな…。と青年は心の中で思った。

「…恐れ入りますが、あなた様は華人様とどういったご関係でしょうか？」

澄んだ声で蒼い髪の少女は、青年に問う。怒りを隠しているような表情である。

強い瞳を青年に向けた。

「俺？」

左右前方を振り向きながら青年は言う。惚けてる分けではないらしい。

彼は素がこうなのだ。

「はい。…そうです。」

「ん。多分無いというか、俺は覚えていないんだ。」

「そうなりますと…華人様の…」

少女は言いかけたまま、理解したように1人で頷いた。すると、一旦目を瞑り、瞳を開けた。

その瞳は先程とは違く、優しい瞳になった。

「先程は失礼しました。私は藍依^{アオイ}と申します。華人様のお供をさせて頂いています。」

すんなりと大人びた声で言った。

礼儀の良い子だなと彼は思った。

やっぱりこういう時は自己紹介するものだよな。と思うもの

「えー俺は」

30分経過・・・

しょうがねえ！この際、嘘も方便だあ！

「静雄です。」

「それは嘘だと思えます」
ばらすなあ！

桜色の少女：華人に的確につっこまれた。

「…とまあこんな感じなんすよ。」

適当にごまかして、頭を掻く。

「長い自己紹介ご苦勞様です。」

くすつと笑って、藍依は言った。

「つまり…記憶がないのでしょうか…？」

藍依は問う。

「ああ。そうなんだよ」

何だ。話分かるじゃん。最初から言うべきだったな。

すると藍依は珍しいものを見るように、俺の手に触った。

「ん??」

手のひらをじつと見つめる。

手相でも見てんのか？

「ふむふむ、よかったですね。」

「何が？」

「華人様からの贈り物ですね。」

*

*

記憶喪失の専門病院に俺は連れていかれた。

良い病院を紹介してくれるとき。

んで隣には2人の美少女が待合席に座ってる分けで…。

「あの人…」

「えー…」

「ロリコンか」

「二股…」

いや。俺の彼女じゃないからな！

見られている視線がなんか痛いし…。ま 気にしてもしょーないけど。

これが例の華人さんからの贈り物らしい。

前までは「* ¥」だったのが、ちゃんと言葉が分かる。

すっげー便利なんだけど、今の状況の声はあまり聞きたくない…

。

あともう1つ。藍依からなんだけど。悪い気もするけど、診察料とか払ってくれるらしい。

ま、ありがたい話だし、甘えさせてもらうか。サンキューな、藍依。

それにしても、通る人男女問わず2人を見てくんなあ。すごいな。こりゃ。

看護師さんもこっち見てんぞ。

『…違います。あなたを見てるのです』

華人が彼にひそひそと話しかけた。

「は？んな分けねえーって。」

笑いながら手を振る。

「って心読むな！」

本当に心読めるんだな・・・。

軽く華人をぺちぺちと叩く。

「やめろよ」

俺がそう注意すると少し、しゅんとしたようだった。

「えへへ」

藍依を見ると、お行儀良く座っている。

大人びたクールな表情。悲しげな瞳。

そんな姿を見た彼は、彼女に話しかけようと試みる。

「あのさ、」

「？ はい。」

「藍依って何歳？」

「…15です。」

彼の年の基準とこの国の年の基準は同じくらいらしい。

「俺っていくつに見える？」

「華人様から聞いた方が確かだと思いますが…」

「藍依の口から聞きたいんだよ。」

「…」

ん？顔真つ赤。

ヤベ！何か俺やバイ事いつちまったか？

いや！別に藍依と話したいだけであって、いやらしい意味じゃないぞ！

藍依は顎に手を当てて考える。

しばし沈黙。

（何かここまで悩んでもらうと悪い気がすんな…）

ちよん　ちよん　青年の服の裾を引っ張る。

「き、決まったよ」

「おお。何々！」

藍依が耳に口を近づけきた。

「十八」

そして綺麗な声で答えた。

「ふーん、そっかそっか。ありがとな。」

しーん・・・沈黙再臨

「なあ、藍依」

「…？」

「俺に名前付けてくれよ、俺名前忘れてっからさ。何かと不便だろ名前ないよ。」

藍依は困った表情を浮かべた。

「はあ。ですがそれでは：あなたが犬みたいです。」

ふっふっふ！藍依をからかってみつかない！

「ん。じゃ犬でいいよ。藍依ご主人様。」

俺はにっこり笑った。

作り物の笑顔じゃなくて自然な笑顔。

こんな綺麗な笑える人がいるのか。と思えるぐらいの笑顔だった。

た。

つられて藍依も頬を緩めた。

「では、考えとき…ます。」

藍依の表情が柔らかくなつたのは、誰も気付く事はなかった。しかし、2人を見て少し悲しげな表情を浮かべた少女。

1人で遠い昔を想いながら、瞼をゆっくりと閉じる。

「もう、キミじゃないんだよね」

きゅつと拳を握る。

「私の名前なんか、覚えている訳ないよね…」
暗く切ない声。

「うん、分かつてる」

過去を封印する、私の心と一緒に。

永遠に、凍らせるんだ。蘇らないように。

思い出と記憶は、もう変えられない。変わらない。

あれが結末…最後のページなんだ。

終わってしまった、何もかも。

物語の続きは始まらない。

3・月光と華音（後書き）

お読み下さってありがとうございます!!
次回も宜しければ見て下さい。^^

4・天使との関係（前書き）

タイトルを変えさせて頂きました。
あらすじも変えてみたので、注目して頂けると
嬉しいです。

4・天使との関係

華人の顔が暗く、藍依は悩み耽っている。宣告された本人は全然平気な顔でいる。

なぜそんな状況かというと、青年の記憶喪失は重症の病でもあるらしい。

青年と藍依と華人は病院から出てきた。青年に宣告された病気、記憶障害・短命症。

その名の通り、記憶は抹消され死までの時間が短くなる病気。正式にいうとこれは病気ではなく、呪いらしい。

つまり、記憶喪失の原因は、何者かによつての呪い。

封印解除の魔法をかけてもらえれば、呪いは解けるらしい。

「しかし、この国では魔法が禁止されている。なので、ここから遠い東の国に居る魔術師に、封印解除の魔法をかけてもらえばいい。そうすれば、記憶が元に戻る。」

と病院の医師に説明された。

「……」「……」「何でそんなに暗い顔してんだよ。」近くの自動販売機の前で3人は立ち尽くしている。「お前らが落ち込むものじゃなくね？」その時に藍依が瞳を強くして言った。

「私達には確かに関係ないかもしれませんが、私も……華人様も不安なんです！」

言葉を詰まらせ、瞳は潤み始める。「……あなたの事が心配なんです。」

その言葉を聞き青年は意表を突かれた顔をした。「へ？……あ　わり。なんかお前らまで巻き込んで。嫌な思いさせてさ。」少し暗い顔で、気を遣って話した。

「俺達つてさつき会ったばかりなのにな。」「・・・」罪悪感を少し感じながら青年は言った。

「…何でこんなに関わっているんだろうな。」

「俺なら平気だからさ。何か色々ありがとな。華。藍依。」

そして屈託の無い笑顔をみせる。

「…」「…」沈黙する2人の少女。

その空気を遮るように、青年は近くにある自動販売機で異国の通貨で買おうとする。

おいおい。そのお金で買えるのか…？ピ

！

はは。やっぱり買えないようでしたな。残念！その硬貨はもうここでは使えないな。

『当たりが出たからもう一本選べるよ』

…。オイオイオイ！！恐るべし自動販売機！恐るべし幸運！

「お ラッキーじゃん。」そう言ってもう一本ジュースを選ぶ。

ガジャン・ガジャン・ガジャンツ！開け口からジュースを取り出す。青年の手には、サイダーとオレンジジュース100%とコーラがある。

「ほい。今までのお礼。」2人の頬に冷たいジュースを付ける。

「冷たい…。」藍依は言う。「全然冷たくなさそーだぞ。」

「そんなこと…ない。」藍依は目を逸らす。「ふ そっか。」彼が笑うと、

藍依は手にサイダーを握った。

「ほい。華も貰ってくれ。」「…。」「貰ってくれないと頭に乗っけるぞ。」

「…。」「？」彼は華人の顔を覗き込む。

華人の瞳は凍っていた。時が止まったように。「どうした…？」

少女の綺麗な瞳に一筋の涙が流れる。

「また…どこかに行っちゃうの？」

「1人で抱え込まないで…」

少女がその場でしゃがみこんだ。しゃがんだというより、倒れたに近い動きだった。

「華人様…っ」藍依が近寄る。華人は気を失っているようだった。

「すいません。華人様を宿に連れて行きます…っ」藍依は焦っているが、的確な選択を選んだ。「あなたも…来てもらえませんか？」

「華人様がこんな状態になったのは、あなたに会ってからです。」ズキッと彼の心が痛む。

「あなたには記憶が無くても、華人様はあなたを…覚えているのだと思います。」

「きっと、とても大切な人だったんです。あなたが。」

藍依の言葉が一つ一つ胸に刺さっていく。血の気が一気に引いた。

瞬時に遠い過去が蘇ってくる。酷い頭痛と目眩がした。

辛く暗い過去。痛い痛い。

「…やめろ。」桜の髪の少女 風が舞う庭「やめろ…っ」

彼の視界に懐かしい風景が、ぱっと浮かぶ。

綺麗な蒼い空と桜が舞っている。そこには少女がいつもいて、自分を待っていた。

ここが自分の居場所だった。幸せの音が響いていた。

白い翼の天使・桜吹雪に・雨が強く叩く・視界は真っ黒で

紅い桜

何もできない

紅い雨

されるがまま

枯れる叫び声

一瞬にして視界は真っ暗になる。

この世界の音が聞こえる。

現実に戻っていた。藍依が優しい顔で、こっちを見ていた。

「あなたにとっても辛いと思いますが…お願いできませんか。」
華人を背中に背負いしながら、身を屈めて彼を見た。

「宿に行きましたら、華人様と話してくれませんか？」

「あなたの過去にも関係していると思います…から。」

そしてにこつと笑った。彼はその笑顔に救われた気がした。

「…ん。分かった。華と話してみるよ。」彼も精一杯の笑顔を見せる。

彼は一步一步着実に歩く、
真実の記憶に向かって

4・天使との関係（後書き）

お読み下さってありがとうございます！！

彼は郵便屋として働いていたのですが、手紙の袋はどこへ？と思っ
た方もいらっしゃるかと思います。すいません。後々書かせて頂き
ます。

次回も宜しければ見て下さい。^^

5・冷たい手

月が空に昇る頃。涼しい風が窓から部屋に入ってくる。

ここは街の宿。小さいベットのの上に桜色の髪の少女が横たわっている。

少女：華人^{はなびと}は、先程まで苦しい表情を浮かべてたものの、今はすっかり熟睡している。

その隣で、蒼い髪の少女：藍依が、安心したように少女の髪を撫でている。

風が吹きカーテンが揺れる。心地良い風が、肌に触れる。

電気をつけてない、薄暗い部屋の中で、

月明かりに照らされる少女達は、とても美しかった。

静かで、穏やかな雰囲気が漂う部屋で、藍依は窓から月を見上げた。その日の夜の月は、仄かに光っている。月は雲と重なり、月光が夜空に滲んだ。

仄かな光を放つ月は幻想的で、その美しさは絵画では到底表せない程だった。

藍依は月を、ただただ見つめた。月に吸い込まれるような瞳。そこが自分の故郷であるかのように…懐かしい表情を浮かべた。

しかし部屋の部屋には2人だけだった。彼の姿が見当たらない。

宿に行きましたら、華人様と話してくれませんか？

あなたの過去にも関係していると思います…から。

今から少し前：少女達と一緒に彼は、宿の前までついて来たのだが、そこで立ち止まってしまった。

「…覚悟する準備が必要…ですよね。」藍依が彼を見て言った。

彼はゆっくり頷いて、「心の準備ができたらここに帰ってくるから…。」と小さく呟き

颯爽とどこかへ行ってしまった。

どこかで自分と向き合おうとする覚悟をしているのか……
それとも苦しい記憶に目を逸らして逃げ出してしまったか。

* * *

日が落ちて、^{ひとけ}人気のない公園に彼は居た。その公園には大きな湖があり、

自然が溢れ、土地が広く、青茂った芝生が公園の一面に広がっている。

その自然に触れると、誰もが癒されてしまう程、安らかで住民の憩いの場所となっている

場所だ。

大きな湖の前の芝生に彼は、寝転がっていた。

彼の髪と芝生が重なって、草の露が髪についた為か、髪の毛先が濡れていた。

彼の黒髪は、風が吹くとさらさらと揺れた。

目を瞑ったまま、ただその場に居た。

「何かよくわかんねえのに……」

「何でこんなに過去を知るのが恐いんだ……？」

がくがくと体が震える。心がすかすかして、寂しさが心を溶かす。
彼は手を目の上に被せて、誰にも見られないように一粒涙を流した。

「…情けねえな。俺」

*

*

カチャ…宿のドアが開いた。藍依はドアが開いた音で目を覚ました。
「来てくださったんですね。」寝ぼけた声で藍依が呟いた。

そして、壁に寄りかかっていた体を起こして、彼の方へ近づいた。

「よかったです。」彼の冷たい手を握った。あまりの手の冷たさに朦朧もろろと

していた意識が目覚める。「…寒くありませんか？」藍依の質問に返答が無い。長い沈黙が続いた。

「寒い…のかも」ぼそつと声が漏れる。きっと感覚が麻痺しているのかも。藍依は思い、

彼に暖かい毛布を被せた。そして自分のバッグから熱カイロを取り出して、彼の手に付けた。

「…熱あちい」「あ すみません。」藍依はそれををばつと彼から離れた。

「感覚が麻痺している様です…。体が温まるように、温かい飲み物買ってきます。」そう言いながら立とうとしたが、手を引っ張られた。「…え」体制を崩した藍依は

彼とぶつかり、倒れた。床の上で2人倒れこむ。藍依は上半身を起こして、青年に布団を掛けた。彼は目を瞑っている。彼は寝てしまったのか、気を失ってしまったのか。

そして彼のあまりにも冷たい手を握った。「熱…奪はって下さい。」しかし、時間が経つにつれて冷たくなる手。どうしようもなく、た

だ傍に居る事しかできずにいた。

「どうしよう…」掛け布団を何枚も掛ける。しかし、彼の手は凍ったままだ。

顔色も青白く、血の気を全く感じない。

「死んじゃう…の？」彼の顔に触れる。「起きて…。起きて…。」体を揺する。

「・・・っ」「どう…しよう」

風が吹き、華が舞う。

そして彼女は目覚めた。彼を助けるために。桜色の髪を風に靡かせて。

「私に…任せてください。」

真っ白い翼を広げて。

5・冷たい手（後書き）

お読み下さってありがとうございます!!
次回も宜しければ見て下さい。^^

6・天使降臨

風が凍る、冷たい部屋

その部屋には、泣き出しそうな少女と倒れている青年が居た。
桜色の髪の少女は、今までベットで睡眠をとっていた。

そして、おそらく今も…。

蒼い髪の少女：藍依は窓側を、時が止まったように見ていた。

窓側には、月明かりに照らされている、翼を生やした少女がいた。
それは正しく華人まごが翼を生やした姿だった。

一瞬の桜吹雪が舞う

急な突風に藍依は目を閉じた。しかし再び開けると
そこには少女ではなく、長い髪の女性がいた。

藍依の瞳に映るのは、桜色の長い髪、着物のような紅と白の衣装、
紅い瞳…。

服も外見も違う。だけど

「華人様…？」

そういわざるを得なかった。その女性は明らかに華人はなびとに似ていた。
藍依の位置からは、ちょうどベット：華人は見えなかった。普通は
今も寝ているはず。

けれど、目の前にいる真っ白い翼の女性は、華人にそっくりだった。
「…話は後にしましょう」

桜色の髪の女性はそう言うと、部屋の中央へと進み、床に膝をつけた。

彼女は、彼に掛かっている布団をどかし、彼の腹部に手を伸ばした。
「…あなたがそう望むのなら 翼を汚して祈りを空に届けましょう」

そう静かに言い放ち、綺麗に気高く歌いだした。

「この…歌は」藍依は天使に見入っていた。

空遠くまで響き渡る歌声。切ない悲しみの旋律。

華が咲き乱れ・風が吹いて舞い上がり・空が揺れて希望の光を射し

天使がその歌声を 祈りにして神に届けるのでしょうか

眩い一瞬の光が彼の胸を刺した。重く厚い光がずっと胸にのめり込んでいく…。

「何なの…？」呆然と藍依は見ていた。見たこともない現実を目の当りにしたように…

桜色の髪のアнгелは、くるっと振り返り藍依をじっと見つめた。振り返る時に揺れる長い桜色の髪的美しさに、藍依は見とれてしまった。

「この者の病気は治していない…。一時的な発作を直しただけだ。」歌声とは違い、低い優しい声で天使はそう言った。

そして、一瞬の内にして飛び去ってしまった。藍依の目に映ったのは、白い羽だけだった。

喜びには悲しみが 幸福には犠牲が 付き物だから
そんな囁きが藍依の耳から離れなかった。

* *

「ん…」朝の光と風が部屋に入り込む。彼はここはどこだったかとゆっくり思考を

動かす…。気が付くと腹の辺りになにやら重みが。視線をそっちに向ける。

蒼い髪。「藍依…か」藍依はまだ眠っている。安心したようにすや

すやと眠っている。

気が付いたら眠ってしまったのだろうが、どうやら彼は腹枕に
されているらしい。(う…動けねえ)と体を硬直させながらも、彼
は藍依の

頭を撫でた。「…ありがとな。」床には冷めた熱カイロが置いてあ
った。

* *

ふきふき ふき。 ふきふき。 「よしっ…と」

只今、窓磨き中。 まあ。なぜかというと、この宿は格安の牲もあ
って

掃除は、使用者がするっつー訳なんだな。本当は俺用にもう1つ部
屋を借りてくれたんだが
使わなかったというオチで…。

「私…。お支払いしてきますので、お掃除お願いできますか？」
ああ。もちろんと言ったものの。ここの部屋全然綺麗だぜ…。
少し床に鳥の羽・窓に花びらがついてるくらいだな。
ん？鳥の羽？…ま いったか。

それにしても、藍依が起きた時の反応はめっちゃうけたな。
珍しく慌てる姿が可愛かったな。あれ。

…とまあ。ぶっちゃけ言つと華^{はな}と話す時間をくれてんだろつな。
気を遣ってるんだな藍依は。

掃除終了!!

よし、華は宿の外庭にいたみたいだし…話つけてくるか。

6・天使降臨（後書き）

お読み下さってありがとうございます！！

華と天使は同一人物なのでしょうか。

藍依は、天使の歌に聞き覚えがあるようですが…

と言う所がこれからの話のキーポイントだと思えます。

次回も宜しければ見て下さい。^^

7・一息の間

青年は廊下を出て、歩き出した。部屋のドアを閉めようと、取っ手に手を近づけた。僅かだがその手は震えていた。

その手とは裏腹に、彼の表情は自信に満ち溢れている。

意志の強い目・口元はにっと笑っている。

どちらが本当の彼の姿なのだろうか。

*

*

3人が泊まった宿は、新しく綺麗な建物で、人気がある宿だった。

宿の中にはレストランもあり、様々な味の料理が楽しむ事ができる。もちろん各部屋にジャグジーバスとトイレが付いてある。

部屋は使用者が軽く掃除をしなければならないが、お手頃価格で泊まる事ができる。

その宿の人気の理由の1つが、宿の外の庭である。

そんなに広くは無いのだが、草木が茂っており、太陽の優しい光がさんさんと

降り注いでいる。庭の端の方には、桃色・白・水色などの様々な色の花が

咲き誇っていた。花壇の近くには、落ち着いたカフェがあり暖かい飲み物やお菓子

軽い食事などが楽しめる。

そのカフェの白いベンチに少女：華人はちよこんと座っていた。

「よっ」

そう言って彼は右手を上げた。華人は軽く会釈をして、にっこり笑った。

まだ朝早いので、周りには3、4人しかお客はいない。

そんな中、周りを気にする訳でもなくいつも通りの声の大きさと話し掛けた。

「俺さ、さっき持ってた金を両替してきたから何かおごるぞ。」

彼の異国と思われる通貨をこの国で使えるように、両替したようだ。

「これ、見たら華^{はな} どんな顔すっかな」

軽く笑って、彼の持っている例のエコバッグから財布を取り出した。財布を開けると、札束がぶわっと入っている。

「……。」

「俺ってどこの王子様だったんだろうな。」

にっと笑って華人を見た。

「何か奢りますよ。お姫様」

その答えに応じるように、華人も幸せそうな笑顔を浮かべ大きく頷いた。

「華^{はな}。何がいい？」

目の前には、クレープのようなお菓子がずらっと並んでいる。

そのお菓子は、粉とミクルという木の実を混ぜ合わせ

薄くこんがりと焼き上げた皮に、好きなものにくるんで、できあがり！

…という簡単かつ美味しい、この国での定番お菓子メニューの1つである。

目の前に映るガラス越しのお菓子を食入るように、華人はじっと見つめている。

フルーツが盛りだくさんのもあれば、チョコレートやマシュマロのトッピングが、かかっているものもある。

「……！」

華人はきらきらした瞳で、どれにしようかと真剣に悩んでいた。

真剣に悩む姿を、微笑ましく見守りながら彼は言った。

「食えるなら何個でも買っていいぞ」

「ふにえっ!!」きらきら200%の瞳で彼の方向に振り返る。

なんだなんだその可愛い声は!と内思いながら、

「ほら、決めろって」華人の子供っぽさに心のどこかで安心していった。

「あ……。」

華人はふつと目を逸らし、急に目を細める。急に何かに醒めたような表情をした。

頬を少し膨らませて、寂しさが一瞬表情に過_よぎる。

そして真っ直ぐな瞳で青年に問う。

「私……。やっぱり、子供に見えますか?」

凜とした声が風に鼓動して響く。

彼の心が一瞬空白になった気がした。ふつと何かを思い出す。思い出してしまう。

ぐつと目を瞑って、拳を強く握った。何故少女の一言にこんな心が乱されるのだろう。

なんでこんなに何かを思い出したくないんだろう。

焦る心を隠しながら、彼は口を開いた。

無理に笑って。

「その言い方をするって言う事はさ、華は子供じゃないのか?」

「……。」

「見かけは子供!頭脳は大人!って感じなのか?」

腹に手を当てながら笑った。

「……馬鹿にしていますか?」

落ち込みながら小さい声で呟いた。

「あ、悪い」

「・・・いえ、馬鹿にするほうが正常です」
そう言って寂しく笑った。

「？」

「でもな俺、華を見ているとさ」

彼はそういつて恥ずかしそうに頭を掻く。

無いはずの記憶。

でも、その中にある不確かな記憶。

その記憶だけが彼がもっている1つの手掛かり。

「俺の記憶と重なる所があるんだ・・・」

彼は、ゆっくりと正直に話し始めた。

7・一息の間（後書き）

お読み下さってありがとうございます!!
やっと青年が心の真実を語り始めます。
次回も宜しければ見て下さい。^^

8・消えない傷

2人はお菓子店の前で少し話をして、お菓子を買った後、歩き出した。

黒髪の青年と、桜色の髪の少女：華人は、宿の外庭のベンチに座った。

青年は浮かない顔をしながら、むすっと座っている。

華人は買ってもらったお菓子を、大切そうに持っていた。

「…いただいても、いいですか？」

大きい瞳で、青年をじっと見つめる。

「…おう。もちろん」

目を逸らして、彼は言った。彼の頬が少し赤い、どうかしたのだろうか。

はむ はむ はむ…

「にー」

華人は最高の幸せの時間を過ごしているみたいだ。…何故に猫語？その姿を見て、悶^{もた}えている人間が1人。

「…やべえ」

顔を隠すように、バッグにうつむせると、誰にも聞こえないような声で、ぼそつと言った。

先程から観察してみると、彼の行動がおかしいではないか。

華人はお菓子をちまちまと食べていた為、結構時間がかかった。

「ごちそうさまにゃー」

（華人です）おいおい。キャラ変わっているやんけ。もしかすると、幸せな時に猫語になるのだろうか。

「お菓子ありがとうございました。」
標準語に戻って、にこつと笑う。

華人の笑顔に戸惑ったのか、彼の表情が一瞬硬直する。

「…はあー」

すると、青年からため息が漏れた。疲れた時にするため息では無く、何かに迷っている

ような深いため息だ。

「??」

華人は不思議そうに、彼を見つめる。見ています光線を浴びている彼は、光線を放った本人に、顔を向けた。

ぱち

視線がぶつかる。ご機嫌な顔で華人は彼を見ている。すると、華人は真剣な眼差しで話し

始めた。

「あの…記憶のあの人って誰なのですか？」

突然本題になって少し驚きながら、彼は視線を落とした。

「・・・」

「分かんねえ。……ただ、その記憶だけは、名前を忘れた時から覚えていたんだ」

「すんげー鮮明にさ」

華人はベンチに座り直しながら、彼の言葉に耳を傾けていた。

彼は自分の記憶を言葉にした。長い話だったが、華人は少しも飽きたそぶりを見せずに

彼の言葉に聞き入っていた。

「その時の記憶の俺はさ、悪ぶつてるといつか、かつこつけててさ、たくさん仲間とつるんでるんだ。色々めちゃくちゃな事を楽しがって

やってたよ。…そーいや、警察から逃げる毎日だったな。

けどな、理由は分かんねえけど、段々人が離れていつてさ、結局は仲間全員に見捨てられるんだ。

んで、はぶられた俺は、家に帰りたくねえからさ

いつもの場所に帰るんだよ。暖かくて綺麗な光が刺すところ

そこは、風が舞う庭なんだ。

すっげー広い庭で、気持ちいい風が吹いててさ。

俺は風が舞う庭って呼んでるんだけど、本当は誰かの家の庭…なんだ。

その家の人達は、昔から俺に親切にしてくれたんだ。んで、そこには俺と同じ年ぐらいの

女の子がいんのな。そいつはさ病気もちで、学校はほとんど休んでてさ、

友達がいないらしいんだ。だからそいつと友達になってくれてそいつの母親に

よく頼まれてた。けど俺は絶対^{ぜってえ}ヤダって言って、断ってたな。

俺が口が悪くても、そいつの母親はいつも優しくしてくれんのな。

旨い飯も作ってくれるし、暖かい布団で寝させてくれた、俺を家族みたいに接してくれていた。

そんな人達に甘えて、俺は普通に生活してた。

そいつとも結構話をしたな。すげー変な奴だった。

いつつものにこしててさ、俺が何をしても、びびんないんだ。

俺がいらいしたから、そいつの気に入っている人形を破って捨てても

怒りもせず、泣きもせず「…キミのお望みのように」って寂しく笑

って言うんだ。

親にも話さなかったんだと思う。俺は全くそいつの両親に叱られなかった。

俺はそいつをモノ扱いしてた、俺のストレス発散人形だった。

随分酷いこともやった。それでも俺の心は満たされなかったけど、

でもそいつはさ、俺がどんなに傷付けても「…キミが望む通りに」
って言うて

夢げに笑うんだ。俺が割った高いガラスのコップも、自分が割った
っていつてさ。

俺が壊したものの全てそいつが片付けるんだ。

これでもかってぐらいやったぜ？でも全然へこたれやしないんだ。

はつきり言うて、俺はそいつが嫌いだった。何良い子ぶってんだ、
気持ち悪いって、吐き捨てるように何度も言った。
けど駄目なんだ。

あいつは寂しく笑って「そっか…ごめんね」って言い続けた。

俺はあいつを認めたくなかった。良い子がこの世に存在するのが嫌
だったんだ。

良い子の存在を認めてしまったら、俺が劣っている事を認めること
になるから。

俺が駄目な奴だから、父さんも母さんも俺を捨てたんだって。

そんな事絶対認めない。この世に良い子なんて居ない。

この世に生きている人間、全員駄目な奴なんだ。

俺は別に劣っている訳じゃない。

俺が捨てられたのは父さんと母さんの性だって何度も自分に言い聞
かせた。

あいつに怒ってもらいたかった。もつと醜い所を見せて欲しかった。あいつは綺麗じゃないって堂々と言いたかった。だからそいつに言っただ。

「…お前は綺麗じゃねえよ。良い子ぶってんじゃねえ。気持ち悪いんだよ。とつとと失せろ!!」 って

そしたらさ、「そう…だよ。私、綺麗なんかじゃないよ」

「良い子でもない…。」

ただの あなたの道具ものです

・・・

それが嫌なんだよ

もつとびびって泣いて喚いてどうしようもないくらい暴れて滑稽な姿みせて見るよ。

お前がそんなだから、俺はいじめたくなるんだ

お前が汚ければ、お前の事、痛めつけなくてすむのにさ・・・

お前って馬鹿だな

「…。」

「道具なら本望だよな」

俺は、ポケットから切れ味の良く鋭い刃物を取り出して、そいつの首に近づけた。

8・消えない傷（後書き）

お読み下さってありがとうございます!!
次回も宜しければ見て下さい。^^

9・罪の深さ

刃物を首に突きつけられる少女。

俺は本気だった。本当に殺してよかった。…それぐらい俺は壊れてたんだ。

他人に刃物を首に突きつけられる感触って分かるか？

今までの苦痛が全部幸せに思えるぐらい。血の気が失せて、体が震えて、

何でもするから何もしないで下さい！って情けないこと堂々と言えろと思うぜ。

それぐらい死は恐いって、俺は昔…経験してた。

俺は狂気の目であいつを見た。

死に怯える情けない姿。生きたいってすぐる欲望。

やっと見られるんだって、震えながらあざ笑ってたんだ。

…けど駄目だった。

あいつの目は、いつもと何も変わっていなかった。

ただ真っ直ぐなんだ。

死んでも構わないというか、死を恐れていない目…なんだ。

それを見た俺がびびってさ、力が抜けて、刃物を落としたんだ。

俺は、あいつに覆いかぶさるような体勢だったけどな、

何が起きたか分かんねえ内に、吹っ飛びながら俺はあいつから離れたんだ。

がくがく震えてる俺にさ、追い討ちかけるような事するんだぜ？

そいつが立って、落ちている刃物を拾うんだよ。

俺は殺^やられると思った。

・・・

けどな、そいつは刃物を俺の手に握らせただ。

「キミが実現したい事：叶えてください」

そう言つて、にこつといつもみたいに笑つた。

俺はようやく普通な思考が戻つてさ、人を殺すことが、
どれだけ重い事、危ない事つて分かつたんだ。

何かもう、涙が止まなくてさ、全部を吐き出すように叫んだな…。

そいつは俺を見て、抱きしめたんだ。

ただ優しく、俺という存在を受け止めてくれたんだ。

・・・とまあ記憶にあるのはこんな、情けない話なんだ。

* *

「苦しい記憶…話して下さつてありがとうございます。」

華人は、彼を見つめてそう言った。

彼は、華人に見とれた。

大きな紅い瞳、桜色の髪、にっこりと笑う笑顔。

「やっぱ…似ている」

彼は、ぼそつと呟いた。

「？」

華人はそんな彼を見て、きょとんとしている。

すると、華人は頬を緩ませてさりげなく笑つた。

「そうそう俺さ、ずっと気になつてたんだよね」

不意に彼が明るい声で喋りだす。

「？ はい。何でしょうか？」

「華人わいじんつて本名、なのか？」

彼の表情は明るく、質問に深い意味はなさそうだ。

だが、華人の表情は固まって、少し申し訳なさそうな顔をした。

「…いいえ。本名ではありません」

「へえ。」

「企業秘密なのです！」

人差し指を立てて、ぴつとポーズをとった。

「企業？」

あつと驚いた表情を華人は浮かべた。

「言ってますん…でしたっけ？」

華人は少し悩みながら、話し出した。

「華人、について…」

*

*

「…とようするに華人は、世界中に花を咲かせ、自然を守る団体つて事か？」

「はい。そして私達は、世界中に花が咲く日を夢見て、旅をしているのです！」

きらきら、いきいきと話す華人は、いつもより元気に見えた。

「…でも本名を隠す必要は無いんじゃないかね？」

彼は、そういったごく普通の質問をした。

華人はにっと笑って、腰に掛けていたベンチからぴょんと跳びはねて、

芝生の上に足をつけた。

そして、手を、彼の方向に指し示すように向けた。

「あなたのお名前は…どなたがおつけになりましたか？」

「う…っ。俺の名は分かんねえけど、まあ、普通は両親がつけるよな。」

「両親とは何ですか？」

「何って…」

ん。悩む彼。彼は何処まで深い考えを巡らせているのだろうか。

「人。」

おっと！普通な返答出ました！

「ということは、あなたのお名前は人がつけたものですね。」

「ああ」

「では、これはどなたが名をつけたか？」

そう言つて、右手で空をさした。

「人……じゃね。」

「そうですか。では、あれはどなたが名をつけたか？」

今度は、花壇の花をさした。

「名つていうか、花の種類は人が名付けたな。」

「では、あのお花とその隣のお花の名はありますか？」

どんだん不思議な質問をされ、戸惑う彼。

「わかんね。つけてあるのかもしれないし、ないかもしれないな。」

「……どなたが？」

「人……」

……ああ。そういう事かと彼は理解した気がした。

「人に呼ばれる名は無いって事か？」

華人は首を傾^{かし}げて笑顔を見せた。

「それに花には1つ……1人がありませんから

1つの種で複数の花が咲いたら、名はどうなるのでしょうか？
だから、私達は全ての花を……

「華」と呼びます

そして華人は、華と同じ存在です
名前はいりません……」

キミ 名前は？

当ててみて下さいっ

彼は、華人と初めて会った日の事を急に思い出す。

「あれは、私に名前があったら、どうなるかなと思っただけです。」
質問する前に、華人は答えた。

「おい。心読むなっつー」

彼は困りながら、軽く肩を叩く。

「えへへ　すみませんー。」

舌をだしながら、くすくすと笑った。

「何か華って不思議な能力あるよな…。」

私：こう見えても未来予知能力と過去透視能力があるので…
っ！

そーいえばそんな事言ってたな…。

「あれって本当なのか？」

「はい？」

「今度は心読んでないのか…」

「能力の事は、秘密です」

「…結局読んでいる訳ね」

「ゆーびんやさーんの落し物」

「？」

「拾ってあげましょ」

いーちまーい　にーまい　さーんまい　よーんまーい

華人がくるつと回ると、不思議な事に手紙が空から降ってきた。

それを見事にキャッチする華人。

今、華人はどっさりお手紙を抱えている。

「…ありがとうございます」

すげーなと思いながら、仕事を忘れていた自分に呆れていた。

袋を受け取り、よしと覚悟を決める。

「行ってくる！　じゃ」

ひゅーんっ！

「こんな展開ありなのでしょう…？」

困り果ててる華人。確かに、あの人に空気を読んでもらいたいですね

そこに、ちょうど良く 藍依参上！

「華人様…あれって」

「郵便屋さん見事復帰みたいです」

「えっ！」

こんな別れ方ってありですか！？

いまだに名もない主人公。走り去る！

9・罪の深さ（後書き）

お読み下さってありがとうございます！
ついに郵便屋さん復帰です！

…読者様は覚えていらっしゃったでしょうか。
彼が郵便屋だったという事に…

作者自身忘れかけていて…（滝汗）

藍依や華とわかれてしまいました、
これからどうなるのでしょうか？

次回も良ければ見てください。^^

10・別れ・再開

だだだだツツツ　　！

只今、今作の主人公が、ありえない速さで走っています。

こりゃ。赤い帽子のあの人がスターを手に入れたような姿ですな。
おお！彼のせいで、木が次々と倒れていきます！

ありえなさすぎます！

これはヤバイです！この国の自然除去違反法にひっかかります！

あらら、その姿をたまたま見た警察が動き出しました。

警察官走ります！走ります！

だが、差はどんどん離れていきます。

カチーン

警察官はプライドを傷つけられた！

じゃじゃじゃーん

歩きながら使える黒電話をだした！

お、重そゝ…。

電話で助けを呼びました。

コンセントはないのですが、乾電池式なのでしょうか…。

おっと！3秒で500人の警察官が集まりました。

おいおい！早すぎというか、暇すぎだろー！

まあ平和なのは良いことですが…。

とはいえ、この国では自動車はないので、（自転車も無い）

皆さん1輪車で追いかけております！

奇妙な光景であります。どこかのサーカス軍団みたいです！

そんな事になっているとは気づかずに、猛ダッシュの青年！

* *

そんなやり取りがしばらく続きましたとき。

今の彼の状況は、仕事終わってスッキリ　みたいな解放感に満ちています。

仕事は首にならずにすんだようです。

ですが、彼の前には生存している警察官がずらっと居て、取調べを行っています。

ここの国は自然に関してうるさいですからね…。
処分はどうなることでしょ。

木を30本倒した罪、結構重いそうですよ。

只今、おっさんと一対一で話を始めています。
しかも芝生の上にです。

はあ！？そんな取調べあ（強制終了）

「俺、郵便屋なんすよ」

言い訳を試みる。

「そんな事は関係ないな」

あっさり切られる。

「……。」

「俺、異国人なんすよ（たぶん）」
言い訳パート2

「……関係ないな」

「俺、この法律しらなかったんすよ」
これはマジ。

「ほお。そうか……まあ少しは罪は軽くなるかもな」
軽く流された。

「そういえば君の名前を聞いていなかったな。何ていうんだね？」

「ああ。えつと俺、記憶喪失で名前覚えていないんすよ」

「はっはっは。そんな嘘はやめたまえ！」

「いや、まじなんすけど」

「嘘をつくと罪が重くなるぞ」

・・・ふーむ

「静雄しずおっていいいます」

「嘘だろ」

え・・・そんな

「しずお…静雄って…」

「へ？」

「あの静雄か！！」

いんのかい！！っていうか誰！

「スイマセン…うそっす」

「ふ・・・そんな嘘をつかなくたって。誰にも言わないか・ら・さ

ー！」

え・・・キャラが変わっている、何がどうやら。

恐るべしどこかの静雄君。

・・・

ま、いつか静雄で。

世間話をしている。

以外に話し合うなこの人、と彼は思っていた。

長々しく無駄な話は続いていった。

「俺、知り合いに不思議な友達・・・華人がいるんすけど、
華人ってどういう種族・・・というか団体か知らない？」

おお！タメ口！

彼は軽く笑っていった。

もしかしたら華なら、花だけでなく、木も復活できるかと思った

から聞いたのだ。

「華人様はすごいぞ。枯れた花も木も人も蘇らせる事が可能なそう
だ」

「へえ、すげえな！………って人も！」

ちよつと遅い。

「ああ……神に近い人達だな」

彼は心の中で思った。

あいつ、花以外にも関係している仕事に就いてるのか……
うええ！そこですか！？人を生きかえす事に驚きませんか！
何か普通に受け流さないで下さい！

ああ……そつか。

誰かの助言により彼に疑問が浮かんた。

「花以外も蘇らせる事ができるのに、何で華人っていうんすか？」
おいおいおい！そこじゃないって！

警察官は一瞬表情が固まった。だが、ふつと笑ってこう言った。

「お前は知らないのか……華人様達には、表と裏があるんだよ」
静雄マニアの言葉に、彼は背筋がぞつとした。

（表と裏？）

彼は華の人格が偽っているものとは思えなかった。
疑いはしなかった。

だが、華の触れたくない部分かもしれないと思い、話題を逸らした。

「華……華人に、助けにきてもらってもいいつすかね？」

「それができたらベストだな」

以外に好感触！

「それじゃあ、華人様に宜しくな」

んー。あいつ、30本も倒した木を復活できんのかな。

それに、なんか俺自己中だよな……

世話になったらお礼、しないとな。

「頼んでみるつす」

「ああ。よろしくな。静雄！」
「うっす」

警察官は静雄に想いを託して、一輪車で本部に戻ってしまった。
いいのか！そんなに仕事にアバウトで！

くくく

彼は正式に静雄になった！

・・・マジっすか。

* *

桜色の髪の少女と青い髪の少女が歩いている。

桜色の髪の少女：華人はどこか悲しげな表情だった。

「華人様、次はどちらに行きますか？」

青い髪の少女：藍依は聞いた。

「んー。そうですね。」

華人は目を瞑った。手を空にかざした。

風を感じる、風の声で「華」の叫びを聞き分けた。

「ここから南東の方向が、自然がありません。そちらに向かいましょう」

実はその場所、彼の姓で自然がありません

！

華人がそう言った後、でかい体格の男達が近づいて、周りを囲まれてしまった。

じゃらじゃらしたアクセサリをつけ、派手な服を身に纏っている。

壊れたような表情。でかい態度。

「…何ですか？」

低い怒りを込めた声を、藍依が声を出した。

「そんな恐い顔すんなって姉ちゃん」

けらけらと馬鹿にしたように笑う。

「ご用件は何でしょうか？」

先程より強い口調で言った。

冷やかかで、怯えていない瞳。頑なな意志があるように見えた。

「俺たちやあ、天使様に用があるんだよ」

「お断りです」

きつぱりと言い返す。

少女に反抗されて、むっとした顔になった。

「ちよつと痛い目に合いたいのかな？え？」

ぎろつと睨みつけてくる。

震えあがりそうな深い瞳だ。こんな目をみたら、普通は体が固まってしまうだろう。

「痛い目には合いたくありませんが、絡まれるのも嫌です」

「こんのやろ！生意気なんだよ！」

そう言つて、拳で藍依の頬を思い切り殴った。

バンツ！

高らかに音が響き渡った。

藍依はその場から動かずに、手で頬を触った。

「・・・なんだ・・・血も出てない」

そう言つて勇ましい瞳で奴らを睨みつけ、にっと笑った。

意外な反応に男達は、怒りを感じる前に呆然とした。

「・・・」

そんな姿を冷静に見ていた華は、歩き出し藍依の前に立った。

「藍ちゃん・・・ごめんね」

そう言つて、華は紅い目で男達を見据えた。

力を解放するように、華々しい光が放出されていた。

天使の羽音よ……今ここに

「駄目です！」

藍依は詠唱を止めようとした。
フウツ

少女の凜とした声は遮られた。

『何してんだよ』

がしつと華の肩を掴む。

「え？」

2人の少女を蔽^{いか}つゝい男達が囲んでいたはずだ。

そこを堂々と輪の中に入っている……人間。

惹^ひき付けられる黒い瞳、さらさらの黒い髪、高い身長。

「藍依……大丈夫か」

そう言つて、藍依の頬を触る。

内出血していて、膨れている。

その姿を見て、彼の目の色が、変わった。

「……とりあえず蹴散らすか」

10・別れ・再開（後書き）

読んで下さってありがとうございます！
更新遅れてしまつてすみませんでした。
次回も宜しければ見てください。 ^^

11・蘇る記憶（前書き）

今回はシリアスです。

少しダークかもしれませんが。

11・蘇る記憶

「んだとてめえ・・・！」

男達は次々に彼に向かって拳を向けた。

「よつと」

軽くかわして、相手の力を上手く利用し地面に転ばせた。

そうしている内に後ろから、2、3人武器を持って襲い掛かってきた。

素早く振り向き、武器の持ち手を、まず手で弾く。そして、相手の足を上手くかけて転ばす。

隣にいる奴に足で、持っている武器を蹴って吹っ飛ばす。

「武器飛んだからさ！藍依よろしく！」

「は、はい」

そう言つて、見事に3つの武器をキャッチ。

「おーナイス」

彼は藍依を見て、親指を立てた。

そんな暇、今ありますか・・・。

「後ろです！」

華が叫んだ。

「？」

ザクツ

彼の腹部に刃物が刺さっている。

鈍い痛みが走る。

血が彼の服に滲む。そしてぽたぽたと落ちる。

ガツツ！

「・・・ざまあみろ」

彼の首は男の足に踏みつけられていた。

彼は喉に強い圧力を感じた。

「・・・いつてえんだけど」

喉を足で押されているため声が出にくい。

そして発音になつてない声で呟く。

ぎりぎり痛みが走る。

「悪い・・・」

「は！せいぜい仲間に別れを告げろや！」

「抑制セーブできなくて」

「・・・は？」

ガンツ！！

「うっ！」

「どけ・・・」

低い感情を抑えた声で呟く。

彼は手で男の足首を掴んだ。握力はどんどん強くなる。

「・・・っ」

男の顔はどんどん引きつっていく。

「やめろお！」

「骨・・・折れるかもな」

にやつと冷めた表情で笑う。

彼は気が狂ったように、相手に力をぶつけた。

何かを守るために、何かを失わない為に。

もう手遅れにならない為に・・・。

少し時間が経ち現在、大勢の男達が横たわっている。

男達はぐったりと荒い呼吸をしていた。

彼の姿を見たら一目瞭然だろう。

まず目つきが違う今までに無い、力強い瞳。
黒い瞳は濃さをましていく。
次第に髪の色が薄くなっていく。
黒から灰色・・・白・・・
グラデーシヨンの様に色に移り変わる。
今には綺麗な金髪となっている。

「・・・こんなもんか」

ぱっぱと手を払う。

心配そうに藍依が見つめている。

何かが変わってしまった、それとも記憶を取り戻したのだろうか。

彼を見て、藍依は考えていた。

藍依は恐怖より驚きの方が強く感じた。

この人はさっきまでのあの人ではなくなっている・・・。
どうして・・・。

不安と疑問が藍依の頭から離れなかった。

彼が後ろを振り向くと、丁度華人と目が合う。

華人は目が合うと、ぱっと視線を背けた。

そんな華人を不思議に思いながら彼は華人を見つめた。

「久しぶり・・・だな」

華人に一歩一歩近づく。

「・・・君」

「あ？」

「私は知らない」

華人は俯いた。手を強く握る。

「知らない・・・から！」

そう言うと、華人は走り去ってしまった。

彼女の目には涙が溢れていた。

「なん・・・だよ。あいつ」

彼はそう言つと、目を瞑りしゃがみこんだ。
うつ・・・

ズキンと傷口が痛む。そして酷く重い頭痛がした。
彼は額に手を押さえる。

時間が経つにつれ、髪はどんどん黒くなっていく。
彼から放つ、凄まじい殺気は薄れていった。

はつと意識が戻る。

「・・・俺、何したんだ」

彼は、飛び散っている紅い液体を呆然と見渡した。

* * *

置いてきたの。

忘れるつもりだったの。

心を痛める思い出なら、消してしまおうと。

1人だけ抱え込む事は辛いけど。

君が笑っていたから。

だから

又、新しい気持ちで接しようって思ったのに。

でも覚えていたんだ…。君は。

記憶の片隅で。

それに、さっきみたいになっちゃったら。

思い出してしまったら君は、どうなってしまうだろう。

前…見たいに…？

ううん

…できない。

今更、前と同じようになんてできないよ。
戻せないよね。

許されないよね。

私に見せないで。昔のあなたの姿を。
思い出してしまうから。

心、許してしまうから。

11・蘇る記憶（後書き）

お読み下さって、ありがとうございます！

今回の見所はもちろん、彼が変身しました！（笑）

どうしたんでしょうか。

彼の記憶が戻っているようですが・・・。

いつか思い出す日が来るのでしょうか。

次回も宜しければ見てください。^^

12・光る海

「・・・」

彼は地面にしゃがみこんでいた。

彼の視界に映るのは、倒れている男達と紅い血。

自分の手を見ると、紅く染まっていた。

藍依は彼の後ろに立って、彼の姿を心配そうに見ていた。

「藍依・・・俺、何してた？」

その声に反応して、藍依が言葉を発した。

「私と華人様を守って下さいました」

そう言いながら、藍依は彼に近づいた。

「傷、深いと思います・・・病院にいきましょう」

しばらく沈黙した後、彼は微かに頷いた。

「華…は？」

「華人様も心配です。ですが、その前にご自分の体を・・・」

彼の腹部から紅い血が流れ出している。

血と痛みが彼を刺激する。覚醒していく。

目の瞳がだんだん濃くなっていく。

「いやぁ・・・！やめてえ・・・っ！」

紅い血、横たわる少女

何もできずに、されるがまま

届かなかった想い、冷たい体。

何もかもが遅かった、時を戻すことはできない。

「俺は平気だ」

鋭い瞳で藍依を見つめる。

「あいつを・・・守らなきゃいけないんだ」

彼は走り出した。痛みなんて、傷なんて無いかのように。

* * *

一面の水。潮の音。

海辺に華人は居た。儚げに海を眺めていた。

辺りは日が落ちて、橙色に染まっている。綺麗な海辺に、風が優しく吹き渡る。

「見つけた」

華は、はつと息を呑む。

振り返ると、夕日に照らされる彼が居た。金髪が風に靡いている。

「・・・来ないで」

「いやだ」

華人に近づき、ぐつと腕を掴む。

「何だよ」

強い瞳で彼女を見つめる。華人は顔を背ける。

「もう、遅いんだよ」

消えそうな声で呟く。

「何が」

「駄目なんだよ・・・」

ぼろぼろと涙が落ちる。

「・・・そんな事言われても分かんねえんだよ」

彼はふうとため息をつく。

「お前の悪い癖だぜ？はつきり言えっの」

そう言っ指で華人の涙を拭いた。

その行動に驚いて、華が彼に目を向ける。

紅い瞳が涙で潤んでいる。

「泣き虫なところ、変わってねえな。お前」

優しい瞳。穏やかな表情。昔の記憶と重なる。

優しくて強い君。弱い私を君だけは、守ってくれていた・・・

「馬鹿・・・」

「は？」

上目遣いで彼を睨みつける。

「・・・になんか、会いたかくなかったんだからあ・・・」

泣きながら華は喋り出した。

「ばかあ・・・ばかあ」

ぽかぽか彼を叩く。

「忘れないでよ・・・悲しかったんだからあ・・・」

ふっと彼は笑った。

「ごめんな」

ぽんと華の頭に手をのつけた。

*

*

神様・・・

私、もうわがままいません。

許されなくてもいい。

前みたいに戻れなくてもいい。

彼を苦しませる事になっても、彼を奪われたりなんかさせない。

彼を無くしてしまったら、私はこの世界を全力で守ります。

私・・・天使の宿命は受け入れています。

だから、

その日が来るまで。彼と笑って過ごしていきたいと思います。

ずっと、ずっと。

12・光る海（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

華が、彼に心を開いたようです。

心を開くのを早いですね・・・。

そのくらい昔に、彼と仲良かったのだと思います。

この回から、華が前向きになってきたと思います。

華人の話す天使とは何なのでしょうか？

次回も宜しければ見てください。^^

13・驚きの声（前書き）

今回、藍依の本性が現れます…。

13・驚きの声

夕暮れ、海の波立つ音。

青年と華人は海辺に座っていた。

座っているというよりも、華は青年の肩に寄りかかっていた。

華は眠たそうな表情、そして幸せな表情だった。

金髪の彼は、照れたそぶりはなく真っ直ぐ海を見ていた。
遠く遠くを見ていた。

久しぶりの本当の再開。

秘密や疑問を抱きながら、お互い何も聞かなかった。
いつか嫌でも分かる日が来ると分かっていたから。

*

*

しばらく時は経ち・・・

「華人様…っ」

走りながら藍依が近づいてきた。

「ここに居たんですね」

少し息を切らしながら、藍依は言った。

そして華人に目を向けた。

「・・・」

藍依は目をぱちくりさせた。

肩を寄せ合う2人・・・

藍依の思考回路 選択肢編

1・無難に、昔の友達

2・実は！生き別れの兄弟

3・もしかすると、友達以上恋人未満？

4・ありえないだろう、隠し子

5・禁断。そして絶対あつてはならない、恋人関係

「もしかすると、あの、お2人って…？」

青ざめた顔で恐る恐る聞く。

「鯉人？」

字違うから。

つまり、『恋人』と平然に金髪の青年言いましたー！

「そんな事って…」

愕然とする藍依。

落ち込む藍依に投げかける言葉。

「ん？もしかするとお前ってレズだった？」
プッチン！

藍依の堪忍袋が切れました！

藍依の性格が豹変するのでご注意下さい。

「ふざけんなってえーの！」

彼の胸倉を掴む！

「今頃しゃしゃりでて何言つとんじゃー！」

ぶんぶん振り回す！

「しかも、何故金髪になんだー！」

あまり関係ない。

そして彼を地面に叩き付けた！

叩きつけられた彼、実のところあまり痛がっていない。

「・・・なんだよ」

「あほ、あほお」

ぼろぼろと泣きながら、その場に崩れる。

「お前が、華人様の言っていた人だったなんて…」

呆然と藍依を見る。

確か、前までは大人しいクールな子だったような…

「藍依、性格変わってるぞ」

藍依は涙を手で拭きながら答えた。

「だって…好きな人の前では可愛くなりたいから」

「へ？俺のこと」

「違うわい！華ちゃんのことだよ」

「華ちゃん？」

* *

俺は華から話を聞いた。

どうやら2人は見た目以上に仲が良かったらしい。

藍依は、華人に助けられてから一目ぼれしてしまったらしく、昔に想いを堪えきれず、告白したらしいが

華は「私、大好きな人がいるの」と言って断ったらしい。それは俺の事らしい。少し照れるけどな。

あともう1つ分かったこと。

やっぱり、俺の記憶のあの少女は、華だったって事。

疑問の1つがああの頃と年が変わっていないような…

まあ、あえて聞かなかった訳だけど。

色々あったからな。しょうがねえよな。

* *

今は夜。近くのホテルに泊まる事になった。

相変わらず藍依はいじけていてさ。ふう…めんどくせえ。

俺はご機嫌をとろうと藍依の部屋の前に居るわけだけどさ。

「おーい」

とんとん…返答なし

ま、粘るわけだけどさ。

「藍依ちゃん」

とんとん…

「キモイ」

うっ…何気に傷つくから。

よし、強行突破。

「つーか入るぞ」

がちや

ばたばたつ！

おお。足速いな。

「何入って来てんの！」

「しょうがねーじゃん。開けてくれねえんだもん」

「…」

「話できればいいからさ、ここにいてもいいか？」

「…分かったよ。」

よし、じゃあ本題にはいるか。

「でさあ…」

ぴと

「ん？」

藍依が俺の手を握っている。

「寒い…よね。中、入って」

「あ、ああ」

やっぱり優しい奴なんだよな。藍依って。

よいしょつと

俺は椅子に腰掛けた。

「話って？」

「まあ話っていうか。礼が言いたくてさ」

「礼…？」

「俺が死にそうな時、助けてくれただろう」

「う、うん」

「ん？何でそんなに齒切れが悪いんだ？」

「でも、あれは華人様が助けたようなもの。私は何もできなかった」

「華？」

「その事は、私もよく知らないけど」

「華人様は天使を宿しているみたい」

天使？

「人工天使って知ってる？」

「・・・知らない」

「人工天使というのは、たくさん人の魂と聖霊を紡ぎ合わせて人工的に作ったものの事を言うの。」

昔、天使虐殺と言う事件が起きて、たくさんの人が命を失った。

何者かが天使を作る為に企画された儀式…」

藍依は色々その天使について説明してくれた。

話している時、藍依は悲しそうな顔をした。

言葉から憎しみも感じられた。

「それはともかく、華人様は天使の宿り主として選ばれた…と思う

天使は何者も癒し、気高い力を持つと言われているから」

「あなたを助けたのはその天使だと思う」

「それって華は大丈夫なのか？」

「分からない…最近に起きた出来事だから本にも載っていなかった」
「華に聞いてみる必要があるな」

あいつが本当の事を言うとは限んねえけど…

「ありがとな…ってかさ藍依に渡したい物があるんだ」

「？」

ふっふっふ。これは藍依も喜ぶだろう。

じゃじゃじゃーん

「人形ですか？」

あ、敬語になってる。

「小っちゃいけどお守り、藍依には青い兎人形！」

「か、可愛い」

お、よかったよかった。

「ほい」

「ありがと…です」

ご機嫌取り成功か？

「んじゃ。頂戴」
ちようだい

「お金ですか？」

「おいおい、あげたもんに金取るって俺何者だよ」

「あ、そうですか。では何を？」

俺は自分を指で指した。

その瞬間、藍依は顔が真っ赤になった…何故に？

「名前ですか？」

「ん。そうそう」

「覚えていたんですか」

「藍依こそよく覚えてたよな」

「ずっと考えていたんですよ！なのに急に郵便屋さんに戻っちゃったし…」

「わりいわりい」

「郵便屋やめて、これからはお前らとずっといるから…するべき事もあるしさ」

「…はい。分かった」

ん？言葉変だぞ。

「それでは、名前言います！」

「あ、ああ」

言いたかったんだな…

「梓月シズキです！」

練りに練ったこの名前！あなたが静雄しずおに拘くっていたので、
そこも配慮しました！」

ああ…そんな配慮を、わざわざどうも。

「梓月シズキ…か。何か良いじゃん。（静雄しずおより）ありがとな」
「はい。どういたしまして」

そう言っただけで藍依はにこっと笑った。

以外に子供っぽい藍依とも仲良くやっていけそうだな。

これから、こいつらと一緒にいるつもりだ。

華を守るっていう事もあるし、（っていうか、なんで華狙われているんだ？）

俺のやるべきこともあるし。

これからも色々ありそうだな。

13・驚きの声（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

今回のタイトルの「驚きの声」は

藍依の性格変わった事をいいます。

そして、ついに名前が決まりました！

ちなみにですが、彼の髪はこれから金髪です。

（前は黒髪でした）

金髪と名前がこれからの話のキーワードになります。

主人公は梓月という名前です。

次回も宜しければ見てください。^^

14・異なるキミ

夜が深け朝になった。

その日は曇り空で、風が重く少し肌寒い日だった。

昨夜、3人は別々の部屋で時を過ごした。

隣り合わせた3つの部屋の1つから唸り声が聞こえた。

その声はもがく様な声で、叫び声にも聞こえた。

彼：梓月はふらふらと重い足取りで、部屋を出た。勢いよく扉が閉まる。

梓月は首を抑えて咽^{むせ}ると、ゆっくりと扉に寄り掛かった。

吐く息は白く、顔は赤い。苦しそうな表情を浮かべている。

「……華」

少しずつ寄りかかっていた体が落ちて、床に体を落とした。

*

*

大きい紅い瞳が彼を見つめる。

「大丈夫…ですか？」

心配そうな表情、よく見ると瞳が潤んでいる。

彼はベッドに横たわった重たい体を起こして、深いため息をつく顔を俯^{うつむ}かせた。

「華…俺どうなってる？」

「ふえ？」

華はいきなりの質問に首を傾げた。

そして、まじまじと梓月を見つめる。

「いつも通りですよ」

「…そっか、」

ほっと安心したような表情になる。

その姿を見て不思議に思った華は彼に近づいた。

華の白い手が、彼の額に触れる。

「熱…あります」

「ん、でも大丈夫」

梓月はにっこりと笑う。

「…隠しています」

「へ？」

「私にはもう、あなたの心は読めません…」

華の目の色が変わり、虚ろな瞳になる。

「あなたが完全に変わってしまったから」

悲しげな瞳で華が言った。

「……？」

意味深な発言に梓月は目を細めた。

「俺が変わったって…記憶を取り戻ただけだろ？」

華は無言で首を横に振った。

「正直に…言います。あなたは今までのあなたと違う…」

梓月は軽く笑って言った。

「何言ってるんだよ。俺は俺だって」

華は静かに息を吐いた。

「闇夜に生きる精霊…」

『死月』デス・ムーン…ですよね」

梓月は目を大きく開いた。驚きを隠せずしばらく硬直したようだった。

そして口元がにやりと緩む。

「なんだ…もう分かったのか」

クスクスと笑って華を見つめた。

「さすが華人の姫…いや、天使様」

冷たく鋭い目が、華を睨む。

「…彼を、返してください」

華は怖気ずにひたむきな瞳で見つめ返した。

そんな華を見て、彼はつまらなそうにゆっくりとベッドから降りる

と、立ち上がって喋りだした。

「こいつ自身が俺を受け入れたんだ、あいつはもういない」

ふん、と言うような態度、彼の手が華の首に触れた。

「お前を守る力が欲しいためにさ、こいつは自分を売ったんだよ。知ってたか天使様？」

「…！」

「可愛いお嬢様。守ってやるから安心しろって」

そう言って華の手をとって手の甲に口をつけた。

「や…めて」

ばつと手ではじく。

「本当なの？」

「天使様なら見えてたんじゃないか？こいつの未来ぐらいさ」

「暗い空…満月しか見えなくて、何を意味しているのか分からなかった。

黒い月は夜の精霊を意味とする…それだけしか」

華は体の震えが止まらなかった。

時分の犠で大切な人を失うとは思っていなかったから。

目の前にいるのは、彼とは似ても似つかない冷たい瞳の青年だった。彼の優しく笑った姿と異なる、あざ笑うような表情。

「ま、それがこいつの人生だ。光を失い闇に染まる…お前を守るためにさ」

にっつと笑う。その言葉は華の心を深く刺した。

「私の…犠で」

震える体をおさえてきゅっ^{いぶっ}と拳をにぎる。

しかし、涙は流さずに心が絶望に吞まれていった。

14・異なるキミ（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

梓月が完全に乗移られてしまいました。

彼はどうなってしまったのでしょうか。

代わりに死月が大暴れします！

次回も宜しければ見てください。^^

15・惹かれていく心（前書き）

前回のあとがきに書いてしまったのですが、
彼は暴れません。すみません！

15・惹かれていく心

立ち尽くす少女がいた。

目が黒く澄んでいて、瞳に宿る光：生氣が全く無く、遠い所を見て
いるようだった。

可能性を信じる事よりも、絶望に酔いしれていた。

そんな華を見て、少し罪悪感を感じながら耳元で囁いた。

「ま、俺はお前の敵じゃねえから仲良くしようぜ？」

声が届かなかったように、何も反応が無かった。壊れてしまった人
形のように、

ただ遠くを見つめていた。

「・・・」

その時扉が開いた。

「あれ？おはようございます…華人様。それと梓月！おはよう」

梓月の泊まった部屋に、華が居るのに戸惑いながら、にっこりと藍
依が部屋に入ってきた。

こういう時もちゃんと先に華に挨拶をするのだ。

華人を見て何かおかしさを感じたのか、不満な顔を表す。

「ちよつと梓月！何華人様を悲しませているの！何かしたんじゃない
いでしょね！？」

怒るように言葉をかける。でもその言葉は本気では無かった。

今まで見てきた彼はそんな事をするとは思っていなかったから。

「よう、藍依。いやちよつとさ取り込んでさ」

そう言つて困つたように頭を掻きながら、屈託の無い笑顔を見せる。
その姿に安心して、からかったように喋りだす。

「華人様に失礼ない様にね！それでは、先に1Fのレストランに行
つてます。華人様」

前の藍依とは思えない、元気な素振りを見せた。

華の前ではねこかぶっていた、という事もあるかもしれないが梓月

に心を開いてきた、という理由もあるのだろう。

「ああ、分かってるって。後で行くよ」

そう言って、手を挙げた。にっと笑って藍依は扉を閉めた。

* *

「上手いだろ、華？」

華の顔を覗き込んで、にやりと笑いながら話しかけた。

そんな彼をお構いなしに、時が止まったように立ち尽くしている。

「…反応なしだよ」

つまらなそうにすると寂しげな表情を一瞬浮かべた。

そして何か浮かんだように、にっと笑った。

「華！」

彼みたいな優しい声で、名前を呼ぶ。

その声を聞くと、心にぽつと火が灯るようだった。

はっと意識が戻ったように目を開く、いつものような綺麗な瞳に戻る。

「…えへへ」

微かに笑う、本当の彼ではないと分かっているながらもその声を聞くと安心してしまう。

笑顔が勝手にこぼれてしまう彼の優しい表情。

華の笑顔は天使の笑顔みたいに可愛らしかった。

笑顔を返された死月は、嬉しさと恥ずかしさが混ざった複雑な気持ちになった。

そんな華を見れるなら、あいつのフリをしてみてもいいかもしれないと死月は思った。

「…なんて、キミじゃないのに…ごめんなさい」

華は切なさそうに笑う。彼の代わりにして申し訳ないという気持ちが表れた。

「精霊さん。自分の事は自分で守れます。それに藍ちゃんもいるか

ら…

あなたはあなたの世界へ…戻りたくないのですか？」

死月はふっと笑って答えた。

「精霊界はもう飽きた。俺は、お前とこの世界で時を過ごす。天使の力で永遠に生きることだってお前にできるだろ？」

後もう1つ、この世界を無にする。人なんてこの世界のゴミだ。排除するべきだ。

人間にあんな事されたお前が一番分かっているだろ？」

ざっと悲しみの過去が華の頭を過ぎ^よった。

いやあ・・・！やめてえ・・・っ！

紅い血、されるがままの記憶。

それを思い出すだけで心が締め付けられる。

でもその苦しさを前向きに考える。

「…彼らを消すっていう選択は選びたくないんだ。それは…逃げた事になると思うから」

苦しそうな声で呟く。

そんな華を尊敬するかのように見つめた。

「ふーん…つまんねえな」

「でも、私を守る為に彼を失う事。私、納得できないから…だから」その言葉を遮るように彼は話した。

「…いいよ、分かっている。お前の敵を全部排除したらあいつに返すよ」

ぽんと手を華の頭にのつける。

そして彼みたいに、優しく微笑む。

彼の意外な優しい態度に華は心を動かされた。

「腹減ったし、食いに行こーぜ」

明るい声で華に話しかける彼。

部屋から出て彼の後ろに、華はてこてこについて行く。

彼の背中を見つめて華は思った。

私は、どのキミが大切なんだろう・・・。
誰をずっと想っていたんだろう。
おかしいね・・・。
もう、分からなくなっている。

15・惹かれていく心（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

彼が暴れる予定が、優しくなっています・・・。
心が揺れる華です。

昔からの知り合いの彼、精霊の彼、華はどちらを
大切に想うのでしょうか。

華に待ち受ける天使の宿命とは何なのでしょう？
次回も宜しければ、見てください。^^

16・真実の名

賑やかな笑い声が聞こえる、明るい雰囲気のレストラン。

そこでは美味しい料理を楽しむ事ができた。

朝から豪華な料理が並んでおり、バイキング形式となっている。

綺麗な景色が見渡せる窓側のテーブルで、3人は食事をしていた。

「華人様。この料理はとても美味しいですねっ」

「はい。すごく美味しい…です」

ホットケーキを美味しそうにほうばりながら華人は答えた。

ふわふわの触感のスポンジに甘い蜜とバターをつけて食べている。

贅沢な味わいで、ほっぺが落ちそうである。

「・・・」

信じられないものを見るように藍依は彼：死月を見た。

「?…なんだよ」

「すっごい意外！梓月が甘党なんて！」

ああ、と思い出すように華も喋りだす。

「そういえば甘党でしたよね」

彼は口に運ぼうとしたフォークをお皿に置いた。

「…いいじゃねーか、別に」

顔を少し赤くして、ぶすつとしたような表情になる。

彼のお皿には、色とりどりのデザートが一面に置いてある。

「あははっ！お皿によそる時恥ずかしくなかった？絶対周りの人、

驚いていたよー」

とても可笑しそうに藍依が笑う。

「…俺はお前の性格の変わりように驚いたけどな」

「なにおー！あんだだっけ金髪になってから口悪くなってるじゃん

！」

「俺は理由があって性格が元に戻っただけだし」

「ずるい！記憶喪失の性にするなんて」

「…俺だつてなりたくてなつた訳じゃねえし」

険悪な雰囲気が漂う。

あわわ。2人の関係が危ない・・・？

そんな2人の会話を聞いて、話題を変えようとした華。

「そ、そういうば、なぜ藍ちゃんはずきと呼んでいるのですか」

いつのまにかにズキという名が定着している事に疑問を抱いた。

華は藍依にも彼が精霊に乗り移られている事を、知っていると思ったからである。

「ああ。そっちの死月シズキじゃなくて、こいつが俺に仮の名をつけてくれたんだ」

死月シズキ 梓月シズキ・・・発音が同じな訳です。

ずずつと甘いミルクティーを飲んで死月が答えた。本当に彼は甘党です。

「なんでズキという名前なんですか？」

「あのですね 何かあるたびに彼が静雄にこだわるので、そんなに静雄が好きなら似たような名前にしてあげよう！と思ひまして、ズキという名前にしました」

「…そういうば静雄さんってよく耳にするお名前ですよ」

「そうですね…誰なの？梓月」

ぱりぱりとチョコクッキーを食べながら答える。

「？よく分かんね」

「・・・」

本人すらよく知らない名前…。

食事を終え、ホテルから出る時に藍依が華に話しかけた。

「あの、華人様。次はどちらに向かうのでしょうか？」

「んー。そうですね…あ、そういうば前行こうとしてた場所がありましたよね」

藍依は首を傾げて思ひだそうとする。

「あ！不良にからまれて行けなかった場所ですね」

彼がぶつとばした牲で樹が破壊された、あの場所です。

「音憂はすげーな、樹とか復活できてさ」

彼が口にした何気ない言葉。

「梓月：ネウって誰？」

・
・
・

音憂：音憂！

華は遠い昔を思い出した。

少女は振り返る。

僕、音憂を守りたいから、僕は護衛士になるって決めた…決めました。

なにやら、馴れない言葉で話す少年。

少女は少年の言葉に目をまるくする。

びっくりしたよ。…急に言葉遣いが変わって。

照れくさそうに少年は喋りだす。

だって護衛士は主人に敬語で話すだろ？それに、ただでさえ音

憂は誇り高い華人になるんだから敬語の方がいいと思って。

少年の言葉に少女はくすつと笑う。

あははっ。言葉遣いもどってるよ。

少女の言葉にカチンときたかのようにきつい口調になった。

…これから勉強すんだよ！

その表情を見て少女はほっとしたようだった。

そっちの方がキミらしいよ。

にこつと笑って少女は言った。

「音憂…は私が人として生きていた頃の名前…です」

華は藍依に向かって答えた。

華には疑問が浮かんだ。

なぜ精霊さんが私の本当の名を知っているの・・・？

16・真実の名（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

華の過去を知っている死月。

いつから梓月に乗り移っていたのでしょうか。

それとも他の理由が…？

次回も宜しければ見てください。^^

17・桜の墮天使

音憂：は私が人として生きていた頃の名前：です

華の透き通った声が辺りに響く。

ざわっと風が吹いて、周りの森が揺れた。

戸惑いながら華を藍依は見詰めた。

「人だった頃……とはどういうことですか？」

藍依は不安を感じながら言葉にした。

華人様が人間ではない……？

大きな紅い瞳、綺麗な桜色の肩までの長さの髪。

幼い顔立ち、低い身長。

華は見かけから、何もかも人間そのものだった。

華の言葉に反応するように、黒眼だった死月の瞳が段々と蒼くなつた。

夜の闇のような深い蒼だった。

「音憂……お前」

ありえないものを見るように死月は、華を見つめた。

ざっと鮮明に記憶が蘇ってくる。記憶は全て戻したはずなのに。

震える拳を握り声に出した。

「死んで……たのか」

辺りが凍りついたように、固まりついた。

華は顔を俯いて頷いた。

「……うん、そうだよ。思い出した？」

そう言っ、にっこり笑う。

「あなたが私を思い出したという事は、やっぱりあなたが本当のキミなんだ」

見た事もない冷たい瞳で、死月の顔を覗くように見つめる。

「黒髪だった頃のきみは偽り…なんだよ」

可愛くもあるが恐ろしい表情で華は言った。

「記憶障害・短命症…覚えている？一緒に病院に行った時、キミが宣告された病気、いや呪いなんだけどね」

紅い瞳を大きく開いて、静かに言葉に出した。

「私が呪いを、かけたの」

くすくすと笑い出す。見た事のない表情で。

悪魔のような笑顔で。

突風が吹き荒れる。

一瞬の内に桜が舞い、辺りは白く光りだした。

眩い光の牲で藍依は咄嗟に目を瞑った。

・・・

風が止まり、光が弱まった様子だったので、藍依は瞑った瞳を開いた。

そこには、気高く桜風に吹かれる女性がいた。

髪は腰までのストレートで、桜色の髪。

背中から生える、白い翼。

それは天使そのものだった。

天使は死月を見つめて話し出した。

「死月…きみは言った。私を守る為に彼はいなくなったと」

死月は疑るような瞳で天使を睨む。

「ああ…だから？」

天使は口元だけにつこりとする。

「黒髪のキミも今のキミも同一人物…だよ」

一瞬の内に血の気が失せ、彼は呆然した。

「違う！あいつが俺に頼んだんだ！華を守ってくれて！」

俺は違う！あいつとは違う！あいつは人間、俺は精霊 デスムー
ンだ！」

壊れたように、死月は叫んだ。

息は荒く、肩で呼吸している。彼は心が乱されていた。

そんな死月を馬鹿にするように笑う。

「じゃあ、証拠は？あなたと黒髪の青年との違い」

彼は言葉が出なかった。記憶を思い出す内に、勝手に自分が1人芝居をしていた気分になっていく。

「……」

「あなたの髪が黒髪だったのは、私があなたの精霊力を奪ったから今は精霊力が開花されているから金髪なの」

「……」

「なぜ、あなたの精霊力を奪ったかと言うと、精霊の力はこの星を一瞬で壊すほどの力を持っているから！」

そして私、華人は2つの顔を持っているの。

前にも言ったように、華……つまり花、樹、草。自然を守る団体として活動としている顔。

もう1つの顔は、この星を精霊から守る……精霊を駆除する団体なの！
キミみたいに幼き頃に悪霊に取り付かれて、完全に悪霊に寄生された者の事を精霊と言うの

精霊となった者でも、呪いをかければ大体記憶を忘れて人間として生きていけるんだけど

きみは駄目だったみたい！危ないから早めに駆除しないとね

もう呪い、つまり精霊力を奪う事はできないから覚悟して下さいね
！」

天使は説明を終えると、ひらひらと舞う桜を手で握った。

そして手を開いて息を吹きかけると、光り輝く日本刀のようなものになった。

鋭く綺麗な桜色の剣。

それを片手で握り締めると、にっと笑った。

「記憶を思い出さなければ……生きていられたのにね」

天使は剣を持って走り出した。

17・桜の墮天使（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

なんと華が天使になりました。

天使というよりも悪魔みたいですけど（笑）

華はどういう過程で天使となったのでしょうか？

華の過去は次回書く予定です。

次回も宜しければ見てください。^^

18・選ぶべき道

先程までは楽しく食事をしていたレストラン。

そんな時を過ごしたホテルの前で、静かに戦いは始まっていた。

天使は走り出す。片手に剣を持って。

微かに浮かびながら、風を切る速さで死月に近づいた。

華が舞い、風が揺れる。

一瞬の内に、死月の目の前に足をつけた。

「ぼーっとしないで」

天使は低い綺麗な声でそう言うと、剣を死月の顔に切り付けた。
どんっ

「・・・！」

死月は押されて、頬に軽い切り傷を負うだけですんだ。

その代わりにバランスを崩して吹っ飛んだ。コンクリートにぎりぎり
りと滑る。

コンクリートの摩擦の牲で、死月の穿いていた黒いジーンズが所々
破れていた。

「華人様・・・！やめて下さい！」

今にも消えそうな、かすれた声で藍依は叫んだ。

藍依が死月を押した後に、天使の前に立ちはだかるようにして藍依
は立っていた。

死月を庇うその行動に驚きながらも、冷たい瞳で言い放った。

「藍依ちゃん？・・・あなたに関係ないの」

天使はふっと笑って微笑んだ。

憎しみの込めた不恰好の笑顔。綺麗に笑う華とは似つかない笑顔だ
った。

その笑顔を見て藍依が眉をひそめる。

「…あなたは本当に華人様ですか？」

藍依を愚かに見下しながら答える。

「そう、あなたとずっと旅をしていたのは私よ、一人ぼっちのあなたを救ったのも私。

あなたに利用価値があったから今まで一緒にいたのよ。もう必要ないけど」

「・・・！」

藍依も目元が下がり涙が滲んでいく、悔しさで胸が張り裂けそうになる。

「あなたなんかじゃない！華人様は、そんなお人ではない！違うんでしょ・・・あなたはただの人工天使でしょ・・・」

目に涙を溜めて話しかける。

そんな藍依を見つめて、ふうとため息をついた。

「お馬鹿な藍依ちゃんに教えてあげる。私は犠牲になった複数の少女の魂と聖霊が融合した姿。まあ、あなたの言うとおり人工天使と呼ばれている。

前の姿は、音憂って子の意識が強いみたいだから、音憂って子の姿で生きていたわ。

でも何も変わりはない・・・あなたが慕っていたのはこの私だもの」

苦笑を浮かべながら話す天使に、藍依は絶望した。

自分の憧れていた人がこの人だったなんて・・・

藍依は零れた涙を手で拭った。そして目を瞑って息を整える。

澄んだ瞳できつと睨みつける。

「分かった」

「そう、じゃ離れていて。精霊にこの星を滅ぼされるのなんて、あなたも嫌でしょ？」

死月は立ち上がって藍依に話しかけた。

「ああ。藍依・・・離れてろ」

藍依の後ろから聞こえてくる声。

死月・・・

「さあ、どきなさい」

華人様・・・

正義ぶっている悪魔のような華の天使・一瞬で世界を滅ぼす事ができる月の精霊

天使と精霊あなたはどちらを選びますか？

18・選ぶべき道（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

さあ、藍依はどちらの味方になるでしょう？

すみません！華…というか天使？の過去は

もうちょっと先になります！

すみません。こんな作者で・・・。

次回も宜しければ見て下さい。

19・消えゆく少女

前には天使、後ろは精霊に挟まれて藍依は選択を迫られていた。裏切られた心はひどく傷ついていた。

あなたを利用するためよ・・・

その言葉を思い返すたびに、体が震え、心が痛む。でもその心を閉ざすように、目を瞑る。

裏切られた・・・なんて言っちゃ駄目だよ、だって、それは信じた私の責任だから。

うん・・・平気！

藍依は前を見据えた。

どっちの味方になるかなんて、そんな事決まっているじゃない。

藍依は前に向かって歩き出す。

ずっと尊敬していて憧れを持っていたあの人の所へ。

「天使様ではなく、音憂様の為に協力させてもらいます」

藍依は、華人を見る時と同じように尊敬した眼差しで天使を見つめた。

そんな藍依を天使は馬鹿みたいにみつめた。

「邪魔なんだけど、ま 好きにしたら」

「...ありがとうございます」

藍依は低い声で答えると、腰に巻いていた鞘さやから切れ味のよい長い、シンプルな

剣を取り出した。

見なくても感じる、この感じ・・・。

藍依は剣を構えると、きつと前を見つめる。

遠くから見えても存在感が薄れない、死神のような存在。

今までの梓月とは全く違う人物になっていた。

死月の出す禍々しい気に、藍依は背筋がぞつとした。

「あんなもんじゃないわよ、精霊デスームーンの力は」

天使は全く怖気づいてない表情、声で藍依に話しかけた。

「はい…分かりました」

そう答える内に、一瞬で天使は飛び立つような速さで精霊に向かった。

そして桜色の剣を死月に向かって振りかざす。

首元を狙ったその剣は勢いを増す。

ぱしっ

「あめえ！」

「甘んだよ」

死月は軽々とその剣を素手で掴んだ。

その瞬間に、天使は華やかな閃光をだして死月に打ち付けた。

燃えるような音が響き渡る。死月の腕に当たったようで、火傷のような跡が付いていた。

死月は腕をぱつぱと手で払うと天使を睨み付けた。

「なんだ？そのインチキ魔法」

「インチキ魔法なんて呼ばないで、あなた撃退用に開発した聖光魔法よ」

「ふん。普通の魔法なら俺にかすり傷1つ付けられないはずだな」

そう言つて桜色の剣を手で握り締めて割った。

「これで剣は意味ねえって分かったな」

にやつと笑うと、今度は死月の手のひらから蒼い光の玉が現れて剣の形に変化していった。

蒼く細長い剣、氷のように冷たく鋭い剣だった。

「かすると凍傷すっから」

そう平然と言つて、天使に向かって剣を向け、左肩から斜めに剣を振りかざした。

スカッ

「あ？」

切り付けた感触がない。手に残るのは空気を切った感触だけだった。

剣は確かに当たった筈だった。

天使はくすくすと笑い出す。

「言ったはずでしょ？ 私は人工天使って。聖霊と人の魂を融合したものだって。」

私にかすり傷1つ、あなたは付けられないのよ」

細い瞳で死月を睨む。

「・・・ふざけんなよ」

「冗談なんか言って意味があるとは思えないでしょ」

そう言って、手のひらから再び華やかな閃光を生み出した。

「特大のお見舞いするね」

天使はにこっと笑う。

詠唱をやめさせる事はできない・・・となれば魔法防御をするしかない。

蒼暗い闇のような霧が死月を包む。

「これで、あれ防げっかな・・・」

自信の無い声で呟く。

聖光魔法は死月の大の苦手とする魔法だった。

薄暗い霧を纏っている牲で微かにしか見えないが、天使は半径10mはある巨大な

閃光の光を抱えていた。

「生きるか死ぬか半々だな」

そう言って体に懇親の力を入れた。

ゆっくりと巨大な光が近づいて来る。

「さよなら、死月」

にっこり笑って死月に向かって手を振る。

寸前の所まで光と霧が近づいた。

ドシャアアン

激しい音が周りに高らかに響いた。

しかし痛みは全く感じない、目を開き前を見る。

「・・・」

目の前には信じられない光景があった。

蒼い綺麗な長い髪。

ぼろぼろになった少女がそこに倒れていた。

「藍依！」

19・消えゆく少女（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

天使さん。攻撃を受けないなんて…ずるい！（笑）

藍依は大丈夫でしょうか？

微妙な心境で迷う彼女です。

次回も宜しければ見て下さい！^^

20・お別れの日

輝く光は自分に目掛けて飛んできたはずだった。
多少の怪我ではすまない傷を負うはずだった。

しかし何とも痛みを感じない。

前を見ると自分の代わりにその痛みを受けた少女の姿が居た。

「藍依！」

死月は走り出した。藍依に近づいて体を揺する。

ぼろぼろになった服、頬には火傷の跡がいたるところにある。

藍依の白い肌からは、鮮明な血があふれ出している。

「お、お前！何してんだよ」

突然の出来事に死月が焦る。何故だか無性に胸がむかむかする。

俺なんて必要されない存在なのに。何で俺なんかを庇うんだよ。
。。。

「梓月、梓月・・・」

微かに動く唇。かすれても綺麗な声が死月に聞こえた。

「・・・あんな喋んなよ」

そう言つと、藍依はにこつと笑つたが、首を横に振つた。

「死月：は精霊だけど。そんな事、関係ないよ。梓月は私の大事な友達だよ」

ぼろぼろになつても懸命に喋る姿、その言葉、その存在に梓月は救われた。

「・・・喋んなつて、馬鹿」

消えそうな声で藍依に話しかけると、藍依の綺麗な髪を手で触つた。
さらさらで梳かしても絡まる事の事ない綺麗な蒼い髪。

すると、髪を触る梓月の手を藍依は掴み、自分の頬に寄せた。

そうすると安心するかのようにな藍依は微笑んだ。

「私、思うの。天使様はあなたを殺せないって、きつと演技よ。音
憂様の・・・」

藍依が喋り終わる前に、藍依は悲鳴をあげた。

藍依の体が痙攣していた。電気の魔法をかけられたのか、体が麻痺しているようだった。

お喋りはもう終わりにしてもらっていい？

不満そうな声が響いた。

そんな声など構わず、梓月は藍依の額に手を付けた。

「・・・月夜に欠けし光、ここに集え」

梓月がそう言うと、溢れんばかりの光が藍依を包んだ。

その光は藍依の傷を癒すように、肌に溶けていった。

「……あなた光魔法も使えるの？」

梓月は藍依をゆっくりと地面に寝かした。

そしてふっと笑って天使の方を見た。

「光と闇を操る精霊、デスームーン。お前ならそんなに知ってる。音憂」

ふと見せる惹き込まれるような優しい瞳に、天使はどきつとした。

死月は一步一步天使に近づく。

！

動こうとしても動けない。彼に金縛りをかけられたようにぴくりと動かない。

「音憂、今度は俺の番だな」

そう言っただけで笑って、触れるはずのない天使の手を掴み、彼の首に触れさせた。

「・・・何が、したいの？」

微かに天使の手は震えていた。

「お前の好きにしろよ。煮るなり焼くなり、さ。音憂、今度は俺がお前を信じる番だな」

キミが実現したい事…叶えてください。

幼い頃、音憂として生きていた頃の言葉。

その言葉をふいに天使は思い出した。

今度は俺がお前を信じる番だな。

あの時の真似なのか彼は笑いながら言った。

「お前が実現したい事なら俺、手伝うからさ、全力でやれよ！」

そう言つて、彼は目を瞑った。

彼は死ぬ覚悟をしたに違いなかった。

いや、死ぬ事は構わなかった。

彼女がそれで苦しみから解放されるのなら。

彼女の使命を成し遂げられるのなら。

彼女が幸せになれるのなら。

自分が受け入れてもらつたように。

彼女にもそれができるのなら。

・・・

ぽたぽたと涙が落ちる。

彼は目を瞑っていたため、何が起つたか何も分からない。

「...馬鹿」

微かに聞こえる小さな声。

「私の望みを叶える為に、翼を汚して祈りを空に届けましょう...」

泣きながら彼女は歌いだした。

空遠くまで響き渡る歌声。切ない悲しみの旋律。

華が咲き乱れ・風が吹いて舞い上がり・空が揺れて希望の光を射し

天使がその歌声を 祈りにして神に届けるのでしょう

... さよなら、獅樹^{シキ}

ありがとう

幸せに犠牲は付き物だから。

天使は光となり、光は宙に弾けた。
羽が舞う。華が舞う。

彼が次に瞳を開け、その世界を見た時には、
天使は目の前からいなくなった。

小さな少女。

華のように笑う桜色の少女はもういない。
翼を汚して、祈りを空に叶えたのだろうか。
溢れる抜け落ちた白い羽。

微かな涙の跡。

瞳を開け、彼が見えたのはそれだけ。

精霊の記憶を奪われた。

天使によって。

彼は 精霊の呪縛から解放された。

それは天使の願い。

1人の少女の願い。

少女 華の少女 華の天使 と関わった全て

嬉しくても 辛くても 泣きたいほど幸せな時も

彼には何もたった1つでも

もう

思い返すことはできなかった

あんなに救われた

彼女の笑顔さえ 彼の記憶から消え去ってしまっていた

獅樹君。 ずっとずっと 大好きだよ。

音憂の傍にずっと居て下さい。それが私のお願い事です！

さよなら。 華の少女

20・お別れの日（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

華は元々こうなる事を望みました。

わざと演技をして、梓月に嫌われたかったんです。

自分を罵って欲しかったんです。

そうすれば、梓月とのけじめが付けられると思ったのだと思います。ですが、梓月が本当の自分　音憂の事を守ろうという気持ちに揺れ動きます。

本当は嫌われたかったのに。悪者になりたかったのに。

それでも梓月は、華のことを信じたんです。

けれど決意は変わらず、結末は同じです。

結果は変わらなくても、華の心は満たされたのだと思います。

次回も宜しければ見てください。

21・仕組まれた恋

綺麗な空だな・・・。

風は気持ち良いし・・・っつかここどこ？

・・・えーつと

ああ。そうだ。

藍依と一緒にここに泊まったんだっけな。

ん？他に誰かいたような・・・。気のせいかな？
っていうかさ、藍依何処だ？

お！いたいた。

・・・ん？なんか倒れてるし。大丈夫か？

* * *

「藍依！どした？」

梓月は藍依に近づいた。

藍依はの服には泥がついていたり、所々破れていたりしたが怪我は無さそうだった。

「・・・？梓月だ」

梓月をじつと見つめた。

「おう。藍依だ」

お互いに顔を見合わせる。

「・・・何か不思議。変な感じがする」

藍依は何故か心がスカスカしていた。

大切な何かを失ったような感覚。

「ああ。俺も思った」

沈黙が訪れる。

「何が変なんだろう」

「んー。何だろうな」

2人は思考を巡らせる。

藍依は、何故か分からない事について考える自分達が変に思えてきた。

「っふ、あははっ。何か私達可笑しいね」

藍依がふいに笑い出す。

「まあ、いいんじゃないね。お互い何事も起きてないわけだしな」

お互いが無事に生きている事にさえ何故か安心していた。

「というか、私なんであんな所で寝てたんだろう？」

「俺なんてコンクリートで寝てたぞ」

「あははっ。それ、梓月らしいね」

「それ、どういう意味だよ」

梓月と藍依は軽く言葉を交わした。お互いに気を遣わなくていい、自然体で話す事ができる数少ない存在だった。

何かが可笑しいなんて、誰も気づかなかった。

その記憶さえなくなっているのだから、気づくはずもない。

「そういえば、私達今まで何をしていたんだらうね」

「ああ。あれだろ、あれ」

「？」

「デートだろ、俺達の」

冗談まじりに梓月は言った。

「ばっ！ばか。何言ってるの」

照れているせいか、ぽかぽかと梓月の背中を叩く。

梓月はごめんごめんと悪戯っぽく笑った。

「藍依。ありがとな」

梓月はにっこり笑って藍依を見る。

彼のふとした笑顔にどきつとする。

「・・・え」

「お前が居てくれて本当に良かった」

「それは…私の台詞だよ」

呟くように藍依は言った。

「ん、どういう意味？」

「なっ何でもない！ うゝ…。」

しつ梓月ってさ、これから…どうするの？」

藍依は声が裏返りながら、話題を変えた。

「どうもなにも。ま、適当に働いて、気楽に生きてくつもりだけど」

「適当に働くって、何して？」

「んー。郵便屋とか？」

「ああー。梓月に合ってそう！」

その時の記憶は2人には無いらしい。

「…でもね」

照れながら藍依が言った。

「梓月には、私の村で働いて欲しいなって思ってた」

「へ？」

「い、いや。もしよかったらなんだけどね。」

あのね、私の故郷の村、フェリスっていう村なんだけど、そこに梓月が居てくれたらいいなって思ったり…して」

梓月は興味なさそうに藍依を見つめた。

「ふーん」

その表情を見て、藍依は少し落ち込む。

「来てくれる訳…ないよね」

藍依は肩を落とした。

「そんな所、興味ねえし」

梓月にしては冷たい口調で言った。

無性に悲しくなって、泣きたくなる。

「そっか…何かごめ」

「どんな場所でも構わねえよ。藍依が望むならどこでもついていくから」

そう言って藍依を抱きしめた。

「…わっ」

梓月は藍依を高く持ち上げた。

「…藍依

*

*

梓月は藍依を。藍依は梓月に、互いに惹かれていった。
何か、そして大切な誰かを失って手に入れた恋。

彼の恋は錯覚したものかもしれない。
間違えがあるとすると、彼が少女を忘れていなかったら
少女以外に惹かれていなかった事。

誰かによつて操られた心、それ故に結ばれた恋なのかもしれない。

その恋を結んだのは誰？ 望んだのは誰？

彼と彼女を出会させたのは誰・・・？

21・仕組まれた恋（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

梓月くん全く華ちゃんの事忘れていらっしやいます！（笑）

あんなに華は彼のことを想っていたのに・・・。

ついつい作者自身、悲しみというか憎しみを抱いてしまいました（笑）

彼は藍依ちゃんを好きになってしまいました。

見事にあの子の戦略に引っかかりました、という事です。

彼女はこの結果を望んでいたのです。

彼が1人にならないように。だれかと幸せになって欲しいから。

だから藍依ちゃんと梓月を引き合わせたのです。

彼女には未来を予知する事ができるから、その力を利用した作戦です。

初めて会ったその日から、こうなる事を望んでいたのです。

宜しければ次回も読んでみて下さい。^^

22・幸せの記憶

ここはどこだろう？

ああ。そうだったね。私は生き抜いたんだよね。

ふう、よかった。やっと終わったんだね。獅樹君も藍依ちゃんもお幸せに。

心からお幸せを願っています…。

少女は大きな樹にもたれかかる様に座っていた。その樹の周りには一面に芝生が広がっており、蝶が飛び交っていた。その場所はまるで天国のように優しい光が射していた。

樹には綺麗な花が咲き乱れており、空は透明な青だった。

少女はそこで唄をうたっていた。裏声で歌っていて綺麗で澄んだ声だった。

その唄はかつて藍依と出会った時に一緒に歌った唄で、心を通わして歌った曲だった。

この唄は華人として生きていった中で覚えた曲で、華人に誇りを持ち生きる、などの

華人で代々歌われてきた唄。歌わなければいけない唄。

この国に奉仕をする種族、機関として『華人』という名が付いた。自然を守り、草や花、樹などと同じ目線で接する種族。

環境が悪化していったこの国では、重要な使命をもった者達だった。

歌詞事態は音憂は好きではなかったが、曲のメロディーは気に入っていた。

この唄をつたうと思い出すのだ。遠い昔を。

* * *

少女は駆け出す、大好きな友の所へ。今日は待ちに待っていた休日なのだ。

「獅樹くんっ」

少女は可愛い声で少年の名を呼んだ。その声に気付き少年は振り返る。

そしてにこつとお互い笑った。2人は昔からの幼馴染で、この自然が溢れるこの村には

同じ年位の子供は2人しか居なかったのだった。

2人が今立っているのは獅樹の家の玄関の前で、その周りには花が咲いており、白い石で出来た踏み場を渡って、家の前から玄関まで行くのだ。

音憂はひらひらとした柔らかい色合いのピンクのワンピース着ていて、髪には白と水色の造花の花のピンが刺さっている。

音憂は獅樹の玄関の前に居るのだが、獅樹までの距離が遠い。なぜなら家の前から玄関までが100mはあるからだ。

獅樹は深い灰色のスーツを着ていた。しっかりとネクタイもしており、紳士的な雰囲気をかもち出している。

顔に幼さがあり綺麗な瞳をしていた。純粋な少年。女の子のような可愛らしい雰囲気はあるものの、凜とした強さも感じられ、大人顔負けの知識を持つ少年だった。

獅樹の家はこの村一番のお屋敷だった。

小さな村なのでたいした建物も無いが、その中でも獅樹の家は村

に住んでいるとは思えない立派な住宅だった。

2人は両親の了解がとれたようで、家から公園まで遊びに出かけた。先日から遊ぶ約束をしていたのだ。横に並びながら2人は歩いている。

「獅樹くんスーツで大丈夫？暑くない？汚れちゃわないかな」

眉を細めて、心配そうに獅樹の顔を見つめる。そんな心配している音憂に微笑んで獅樹は言った。

「後々こっちの方が便利なんだ。そうそう。でさ、公園行った後に音憂と行きたい所があるんだ。少し遠いけどいいかな？」

その言葉にきよとした表情を浮かべる。

「…でもお母様達の了解とらなくて大丈夫かな」

心細いような声で問い返した。

「僕にまかせてよ。だって今日は音憂の誕生日だろ？ちょっと羽目はずすくらい、平気だよ」

「はめを、はずす？」

音憂は1人で唸る様に考え耽っていた。2人はまだ5歳だ。意味が分からなくてもおかしくない、むしろ知っている獅樹の方が変わっているのだ。

いつものように公園のベンチに座った。そこでこの村名物のクレープを食べていた。

クレープといっても卵は使っておらずに、秋にたくさん採れる胡桃をふんだんに使っている。

狐色に焼けた、薄くもちもちとした食感が人気を博している。

「苺おいし〜」

ふにや〜とした表情で音憂は言った。そんな音憂を見るのが好きな獅樹は、嬉しそうに音憂を見ていた。

「クリーム、付いてる」

口の端に苺クリームが音憂に付いていた。クリームを指でとらずにぺろっと舐めた。

「ふえ。あ、ありがとぉー」

まだ5歳のせいか、とくにその行動を気にしなかった音憂。ちよつと驚かそうとしたが、見事に失敗した少年、獅樹。

（んー。恥ずかしがる音憂見たかったのにな…）

逆に獅樹が恥ずかしくなってくる。獅樹は音憂が好きだったが、音憂は友達として獅樹が好きだった。純粋な恋心を抱いている少年だった。

「ご馳走様でしたー。ありがとね、獅樹っ」

にこつと笑いかける音憂。純粋な笑顔にどきつとする獅樹。

「う、うん。音憂が喜んでくれて良かった」

（くあー。あの笑顔は反則だろ…）

*

*

「ねえねえ、獅樹ここは？」

見た事もない町並みに驚きを隠せない音憂。

そこは人がたくさん賑わっており、建物や家などが続いて並んでいる。

「すっごいねー」

音憂は見慣れない所に来て少々興奮ぎみだった。

「ここはぶどう酒で有名な街、シャワール。陽気な人達が多くて治安はいいって。」

音楽好きな人が多く、楽器職人がここで勉強にくる場所なんだった。そもそも木管楽器の材料に使うヴェルアという樹が…」

* 只今勉強中…

「ふええ。獅樹は物知りだねえ。すっごいねー」

「3分で覚える音憂の方がすごいと思うけどね」

獅樹が話した内容を丸々覚えてしまっていた。1回話しただけで、音憂は安易できてしまう能力があった。

音憂の能力には驚いてばかりだ。音憂と獅樹が始めてあった時、音憂が獅樹に話しかけた一言目が「獅樹くん、初めまして」だった。あつた事もない少女に名前を言われて戸惑った獅樹。でも可愛らしい雰囲気や純粋な心はその時から変わっておらず、すぐに打ち解けた2人だった。

街中を歩きながら2人は話していた。美男美女の2人（といっても子供だが）は周りの視線を奪っていた。

中には2人に敬意をしめしている人もいた。音憂は戸惑っていたが、獅樹は当たり前のように平然としていた。

そう、獅樹は世界の中でも有数な会社『魔輝石』を扱う大企業の社長の息子だったのだ。

* *

「音憂、誕生日おめでとう」

その言葉と共に、扉が開かれた。扉の向こうは大きな個室となっており、執事が2、3人立って軽く礼をしていた。個室の中央にはガラス張りの何かが置かれていた。

2人は近づき、ガラスに囲まれている何かを覗き見た。

「わあー。すごいねー」

透明で薄いガラスから見えるのは、美しく輝く宝石だった。正しくこれは魔輝石という物で、身に付けた人の潜在能力を発揮することができるとても貴重なものだった。

「父さんから了解をもらったんだ。『音憂ちゃんの誕生日なら、

仕方が無いか』だつてさ」

「ふえ。貰つていいの？」

「うん、一個だけだけどね」

一個だけでも丸がいくつ付くか分からない。

「わゝ。ありがとー」

音憂は魔輝石を眺めていた。その中で選んだのは、ピンク色の真珠の上にルビーで作られた薔薇がついている指輪だった。

「かわいいーの、これ」

飛びつくような勢いで獅樹に抱きついた。

「本当に本当にありがとー！」

可愛い声で何度も繰り返す。音憂にとってはこれが最高の誕生日になった。

生涯で一番の宝物。だつてキミがいてくれたから。

いつからだろう、キミが離れていった日は。

いつまでも、この時のキミの事は忘れないよ。

22・幸せの記憶（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

とりあえず、音憂ちゃんお疲れ様です。

彼女は使命をやり遂げました。

話の前の方で唄がでていますが、実は藍依ちゃんが何話かで歌っております。

この唄は2人の絆を表している歌です。

余談ですが、設定上では藍依ちゃんの方が歌が上手いです（笑）

そして音憂ちゃんの過去が出てきました。

村で暮らしていますが、裕福な所で暮らしています。

そして獅樹くん！いわずとした梓月の過去の過去です（笑）

精霊化する前の人間として、音憂ちゃんと幼馴染として関わっていました。（実は！）

その後に精霊化して、凶暴になってしまいますが・・・。

精霊化した彼と音憂ちゃんの話は、何話か前で出ています。

また凶暴化した彼が出てくるので、振り返ってみると繋がって面白いかもしれませんが（笑）

長くなってすみません・・・。

宜しければ次回も読んでみて下さい。^^

23・絶望の記憶

獅樹くん…獅樹くん…獅樹くん。

こわいよ。すぐこわい…。私はここにいないといけないんだって。お父様もお母様も、みんな。誰一人助けてくれないよ。ここで、生きなきゃいけないなんて…。

いやだよ…。

そんなのいやだよ。

大好きな獅樹くん。今でもこの気持ちは変わらないよ。

どこにもいかないで、私の傍にいてほしい。ずっと待っているから。ひとりで、まっているから。

* *

懐かしい幼い声、頭の中で繰り返される。

そう、私の…音響の声。

何で繰り返されるのだろう。これは罰なのだろうか。

愚かな答えを出した、私への。

鳴り続ける私の記憶。誰か止めて。声を止めて。

いや…いやなの。

何で、何で…。

死んでしまったら思い返さないといけないの…？

こんな記憶なんて、綺麗に消えてしまえばいいのに…。

* *

「獅樹くん最近体調が良くないみたいなのよ、心配だわ」

お母さんがそう言っていた。あ、そっか。

獅樹くん在最近会えなかったのはその理由だったんだ！

私は毎ジャムを塗ったトーストをほおばっていたのだけど、朝食を残して獅樹くんのお家に向かった。お母さんが私を呼んだけど、頭に入らなかった。

私は家を飛び出した！

そして息を切らすぐらい、私は走った。走るのは得意ではなかったし途中吐きそうになったけど、頑張って走った。

ふ…あ…シキく…ん、獅樹くん！

私は獅樹くんの家のインターホンを押した。

「…音憂さんですか、少々お待ちください」

獅樹くんのお付の人の声が聞こえた。オートロックの扉が開いた。

「どうぞ、お入りください」

いつもなら扉の前まで獅樹くんが来てくれるけれど。

体調が悪いだけなのかな？風邪なだけ？

でも、何だかとっても心配なんだ。私の気のせいでもありますように。

「お邪魔…します」

私は靴を脱いで、部屋の中にお邪魔した。

目の前に、顔見知りの執事さんがいた。夜乃さんという人で、とても優しくしてもらっている人。でも、いつものにつこりとした笑顔は無かった。

「ふう…。どうしましょう」

獅樹くんのお母さんの声がした。

案内されたその部屋には、獅樹くんのお母さんがいた。

とても美しい人で、優しくて憧れの人。

でもいつものような、明るい表情は曇っていた。

何かがあったんだ…。

私は予感を確信してしまっていた。何も告げられてはいないのに。
「お母様、こんにちは」

軽く私は礼をした。獅樹くんのお母さんは振り向いて、必死の笑顔を作ってくれていた。

苦しそうに、笑っていた。

「いらつしやい。音憂ちゃん」

体中から絞ったような声。その声を聞くだけで心が痛かった。

「獅樹くんは、どうしたのですか？」

私は早く本当の事が聞きたくて、質問した。

やっぱり言いづらそうで戸惑っていた。ふと悲しみの目を私に向けて。

私に話しかけてくれた。

「あのね、獅樹は もう……人間では無いの」

え……。

思考がとまった。体中の血液も凍りついたようだった。

死んでしまった？

？誰が？獅樹くんが？何で、どうして！

なにも言葉に出なかった。流れるのは涙だけ。

「ふっざけんじゃねえーよ！」

あ……。

この声は、獅樹くんの声だ！良かった！死んでなんかなかったんだ！

私は声のする所へ走った。

良かった！会いたい、獅樹くん！

「獅樹くんっ」

私は扉を力いっぱい開けた。

ガチャッ

重い扉が開いた音が鈍く聞こえる。

何もかもが遅く見える。時が停まった様に。スロー再生を見ているみたいだ。

黒と茶が混じった綺麗な髪。

私より少し高い身長。

獅樹くんだ！

つり上がった瞳、壊れてしまった人形のような顔。
絶望に酔いしれた、疲れきった顔。

物が散乱している部屋で暴れまわっている。叫び声が聞こえる。とても苦しくて辛い声。

…あなたは 誰？

‘ お別れは悲しくない、決して。 今 ここにあなたがいるから

「お誕生日おめでとう。音憂」

大好きな獅樹くん あなたの事は忘れない。

23・絶望の記憶（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

獅樹くんはもういなくなっていました。

彼は精霊化しました。ですが、精霊として音憂ちゃんと、これからどうやって関わるのでしょうか。

そして、彼には両親がいるのに、何故記憶喪失になって草むらの上に倒れていたのでしょうか？（一話参照）

これらの謎は、これから分かります！

次回も宜しければ読んでみて下さい。^^

24・彼女の希望

獅樹くんは変わってしまった。もう、人間ではない……。

私はその後色々教えてもらった。獅樹くんの病気。

元々獅樹くんは体が弱かったらしかった。

それは悪霊に侵食されているからで、何故悪霊が獅樹くんに近いのかというと、獅樹くんのお母さん　葉樹さんは精霊契約のできる人、精霊士だったからという事だった。

今は精霊との契約を打ち切っているから、もう関係ないと思って、精霊士の使う杖を葉樹さんは捨ててしまった。

しかし、その杖には精霊が宿っており強力な力が込められていた。つまり精霊は見捨てられたと思い葉樹さんを恨んだ。その結果が今の獅樹くん。

もう完全に精霊と融合してしまったらしい。

私がこれらの事実を知ったのは3カ月後。
私はショックで倒れてしまっていた。

* * *

「うつ」

少女は痛々しい声を響かせた。記憶が巡っているのだろうか。荒々しい呼吸をして、顔を伏せた。

「これ以上見せないで！」

これからもつと苦しい記憶が待ち構えているからだろうか。

「獅樹くんは、ずっといるから…私、独りじゃないから。大丈夫…大丈夫。」

少女は一筋の涙を流す。

「獅樹君は消えてなんかいない！」

少女は叫びだす。目の前にある現実を受け入れられないように。

「これ以上、思い出させないで…私の心の中の獅樹くん死んじゃうから…」

そう言つて、貰った指輪を手の中に埋めて泣き叫んだ。

それでも記憶は再生される。

これは死した者の使命だから。過去を受け入れられる強さを持たないといけないから。

二度逃げる事は許されないから。

* *

「おはよう。音憂」

・・・真つ暗だ。

何も見えない。獅樹くんがいなくなっても朝は来るんだね。

時は進むんだね。

神様、戻して欲しいです。獅樹くんが居る時に。

そして、時を停めて欲しいです。そしたら永遠に一緒だから。

獅樹は死んでいないよ。

だれ…？

獅樹のために生きてみなさい。獅樹を幸せにするために、生き抜いてみなさい。

獅樹くん、死んでないの？

心を隠されただけだ、獅樹自身は近くにいる。救ってやりなさい、導いてやりなさい。

どうやって？ 教えて、教えて下さい。

もちろん教えてあげるさ。音憂。君は彼のために命を懸けられるかい？

・・・獅樹くんが幸せになれるなら。

それならこうすればいい。これから君は

*

*

ばっ！少女は布団から飛び起きた。

すると彼女の母親が、悲しそうな複雑な表情をみせて話し始めた。小女は「もう知っているから大丈夫だよ」と微笑んだ。

2人が歩いて向かったのは亡き父親の部屋だった。

「ここに、いるよ」

扉を開け、部屋の中へ入る。

少女の視界に映るのは、金髪の少年。後ろ向きで顔は分からない。

「初めまして、私、音憂って言います」

きょんとした表情で音憂を見つめる。

「あなたとお友達になりたいです」

少女はにつこりと微笑んだ。初めからやり直す事も受け入れた。

金髪の少年の顔が獅樹だとしても。

彼が自分を忘れていても。

彼は人間でなくても。

彼が幸せになるために、少女は自分の全てを懸けて、生きていった。

24・彼女の希望（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

音憂の記憶が再生されています。

これは音憂の過去を読者様に伝えるという理由もあつてなのですが・・。

音憂は苦しんでいます。彼女が決めた事とはいえ、獅樹を失う事は一番辛い事なのです。正確には獅樹が梓月と同一人物と改めて知る事が、ですね。

梓月はきつと、華人の事なんて忘れて藍依ちゃんと幸せに暮らしているのではないでしょうか・・？

次回は神様（？）と以心伝心した音憂ちゃんに隠し能力が授けられます。

宜しければ次回も読んでみて下さい。^^

25・キミとの出会い

キミはもう、獅樹くんではない。

本当は思い出して欲しい。あの頃の獅樹くんに戻って欲しい…。君が獅樹くんでもなくても、私は獅樹くんに助けられたから。君を救いたい。幸せにしてあげたい。それが私の望み。

*

*

精霊

近づいてくんないよ……。さっきからなんだよ。

「ねえねえ。キミって何がすき？」

「は？」

「食べ物何がすき？私、作れるものなら作るよ！」

「……腹減ってねえよ」

うざい。俺に喋りかけんなよ。

っていうかさ、疲れた。色んなことに。

なんかどうでもよくなるな……。

顔を上げてみる、あたりは一面桜。

「ここどこ」

そいつに聞いてみる。

「ここは桜のきれいな春！そして優しく吹き渡る春風！」

異様にはしゃいで答えてるそいつ。

（季節なんか聞いてねえ……）

質問には的確に答えてくれ……。

「風の舞う庭っていうの！綺麗だよ」

そう言っつて、そいつは目を細めた。

こいつは中々話が通じないようだ。

その桜を見上げてみる。

ひらひらと舞う桜。

咲き誇る華、花1つ1つに命が宿っているように……。

……綺麗っちゃあ綺麗だよな。見事に満開。

最初は意識が無かった。

目を開くと、目の前に2人の影があった。

そこは真つ暗な部屋で、何もかもが終わっていた。

胸に残るのは、むなしさと後悔だけで。やりきれない思いだった。
手が伸ばされた。

こんな俺を救ってくれるような。

白く小さな手。

そして、ここまで連れて行かれた。

桜の満開な庭に。

ここにいる理由は家族との喧嘩からだ。

俺のことが嫌いだったんだ。あいつら両親は。

俺もあいつらが嫌いだったから、家にほとんど帰んなかった。
友達と遊んで、無茶やって。

「あんたの事、もう手に負えないわ……さつさと消えて」

俺はついに親に捨てられて、ここで暮らす事になった。

母親の親友の家に養子として引き取られた。

つまりこの女、音憂って奴の家。

音憂と俺は友達だったらしい。

俺は、所々記憶とんでるから、覚えてなかった。

何日が経っても、何年経っても俺は自分の名が分からないでいた。

だれも教えなかったし、知りたくも無かった。

俺はこの女と母親と暮らしていた。

何か違う、俺は違う存在だ。
他の奴らとは違う。
人とは違う……。

そんな確信はしていた。

*

*

音憂

精霊君とはよく話すようになった。仲良く馴れたのかは分からないけど……。

私は精霊君のことを『キミ』って呼ぶようにしていた。
つつい『シキくん』って言っちゃいそうになるけど。

精霊くんの名前はない。私には付ける権利なんてないし、精霊くんも名前なんてどうでもいいと言っていた。

お母さんは精霊君のことをレイ君って呼んでいる。

ふーむ、『せいれい』のれいからとっているんだよね。たぶん。

やるな、お母さん！ねーみんぐせんす抜群ですな。

よし！只今7時00分！起床の時間です！

「おはよー！」

あ、起きてたんだ。珍しい。

「…はよ」

わあー。挨拶してくれた！これで465回中3回目の挨拶だー。

今日は、わんだふるな1日になるぞー！

「ってか勝手に部屋入ってくんなよ…」

「はっ、ごめんなさーい」

つつい精霊くんを起こす癖がついてしまっ。すいませんー。
そう言っ私は扉をしめて、扉に寄りかかる。

ドガツツ！

いったあー。扉が開いて頭に直撃する。

これは精霊君の癖で、私をからかっていると思われます！

「とろい」

「むー。今度キミにもやってやるからな」

「やってみるよ」

軽く笑ってくれた。悔しいけど、やっぱり嬉しい。

…私、嫌われて ないよね・・・。

階段を下りるとお母さんが朝食の準備をしていた。

「おはよーです。お母さん」

「おはよう、音憂」

お母さんは精霊君に笑顔で「レイ君おはよう」と言った。

精霊君はいつものように呟くように挨拶した。

うん、大丈夫だね。普通の家族みたいだね。

もう、獅樹くんみたいに家族を失わせないから。

精霊だからって子供を捨ててしまった獅樹くんのお母さん。

きっと理由はたくさんあると思う。

精霊化してしまった息子に失望してしまったのかもしれない。

きつと疲れてしまったんだよね。自分にはこの子を愛せない、育てられないって思ったんだよね。

ね。

精霊化してしまっている人は差別をうけやすいし、精霊化が進行してしまったら殺されてしまうから。

『華人』っていう団体の人達に・・・。

でも、捨てられた子供はもっと悲しいと思う。苦しいと思う。

精霊君は記憶を忘れてしまっているから、苦しくないかもしれないけど、どこかで分かっていると思う。傷ついていると思う。

私が見ぞを埋めてあげたい。

でもそれは獅樹くんのためでも、精霊君のためでもなく、自分のために。

* *

やっぱり私、嫌われていたのかな。

私の大事な人形をぼろぼろに引き裂かれてあつた。お父さんから買ってもらった人形。

お父さんはもういない。だからこれが最初で最後のプレゼント。ピンク色のふわふわの兎人形。

今は綿がでて、目が取れている・・・。

泣かないよ、もう。

絶対、精霊君と仲良くなるんだ。

それから人が変わったように、精霊君は暴れだした。

きっと一番辛いのは精霊くん。

昔の事を思い出しているのかもしれない・・・。

両親に捨てられたなんて、私だったらたえられないよ。

「お前、気持ち悪い。うせろ」

そっか…ごめんね

「…お前は綺麗じゃねえよ。良い子ぶってんじゃねえ。気持ち悪いんだよ。とつとと失せろ!!」

そう…だよ。私、綺麗なんかじゃないよ。良い子でもない…。

あなたが幸せになれるのなら、わたしを好きなだけ使って
ばろばろに使っていいから。使い捨てで良いから。

ただの あなたの道具ものです。

*

*

それから死が恐くなかった。何も恐いものがなかった。
精霊君が笑ってられるのなら、何でも努力した。
いつか、この想いが通じますように・・・。

キミに力をあげよう。2つの力。ここまで音憂、頑張ったね。

ありがとうございます。

そして、これからキミは大変なことに巻き込まれる。

え、そうなんですか…。でも…覚悟はしてます。

生き抜いてみなさい、あなたの望むままに。

はい、私の意志を貫くまで負けません…。

神様…道しるべをありがとうございます。

25・キミとの出会い（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

音憂ちゃん頑張っています。

死を恐れる事が無くなった、と音憂ちゃん言っていますが、きっとそれぐらい彼を助ける意志が強いのだと思います。

この話の後半は8話の音憂ちゃん視点です。

今回は、音憂ちゃん『華人』と関わりをもちます。

大変な事に巻き込まれちゃいます。

神様が予想した通りにです。（笑）

次回も宜しければ見てください。^^

26・桜色の手紙

「音憂」

へ？だれかが私を呼んでる。うにゃー。眠いのに……。

夢から覚めて、私は目を開けた。

・・・顔が近い。目の前には精霊君がいます。おっと、勝手に部屋に入るなっていうたのはキミじゃないか。

「はよ」

いつもぶすつとしている精霊君が……。何故？突然の笑顔に私はびっくりする。

「…おはよー」

精霊君、寝ぼけた私の声にせい、笑ってる。珍しい。

「意外とねぼすけさんだな」

ふあっ！

「いつも私が起こしてるじゃないかー！」

これには私だってカチンと来ますよ、だっていつも私がキミをおこしているのに…！

「あの、でも」

「あ？」

「どきませんか？そこ」

今、精霊君が覆いかぶさるように私の前にいます。それに顔が近いよ……。

「嫌って言うたら？」

「…強行突破です」

ふつと精霊君が馬鹿にするように笑う。

「お前には無理だろ」

またまたケン力をつってるのですか。お兄さん。私だってやるうと思えばいくらだって…！

「えいえい」

精霊君を押してみる。

「どーいーてゝっ」

ぴたりとも動かない……。こっちは本気なのに。ぜえはぁーぜえはぁー。

「こんなもんかよ、お前の力は。弱っちいな」

ふ…どうせ私の力はこんなもんですよ。非力ですよ。握力10もないですよ…。

「何で、お前なんだろうな」

「え？」

「俺、女に泣かされた事ねえぞ？」

昨日の事…？

「お前、度胸あるんだな。見直した」

あ…そうだったんだ。

「お前自殺しようとしてんのかよ？」

「え…そんな事無いよ」

「首に刃物突きつけられてんのに、平常心なとこすげーな。俺、できねえよ。そんなこと」

「…えへへ」

「何笑ってんの」

「キミのためならできる…よ。それにキミだったら、私を殺さないって思ったから」

「…お前」

「？」

「俺の事、好きなのかよ？」

あきれた顔で精霊君は言いました。といいますか、知らなかったんだ。

「うん！大好きだよ、キミのこと」

「…！」

さけるように私から離れていきました。

…そ、そんなに照れなくても。こっちが恥ずかしいよ。

「あ、あのな。俺、決めたんだ」

「何を？」

「これから、しばらく修行すんだ」

へ？修行？

修行というと、あの滝に打たれるあの修行…？

うわー。人が変わっちゃったみたいだ。精霊君が修行をするなんて

…。

「何の為なの？」

「それは、秘密」

精霊君は教えてくれないまま、部屋を出て行きました。

何でだろう…。

（あ、そうだ。お礼言わないと…）

私は心を集中して瞑想メディテーションをした。

私にとっては、馴れればそんなに難しくない事だった。

瞑想をすると聞こえてくるの、だれかの声が。

最初は少し恐かったけど、声をかけてくれるのは優しい人だったから安心した。

昔から、私はその人と話すできた。

お父様が死んでしまった、あの日から…。

あの、神様。今までありがとうございます。

あなたの応援がなければ、私、あきらめていました。

それはよかった。でも彼を変えたのは、あなたの力があるからだ。

2つの力を使ってみたかい？

まだ、です。どういう時に使ってみたらいいか、分からなくて。

それに、使いづらいです。

人の過去、未来が見える力なんて、…私にはもったいない力です。

そうか、だが、いつかは使いたくなる時が絶対来るさ。

彼の未来を守るためにね。

…そうなんですか？ えへへ、それではその日までとっておきます。
えと、それでは、失礼します。

外に意識を向けて、心の目を閉じる。

そうすると、会話を終わらせる事ができる。

今日は長かったかな？ふう…少し疲れた。

やっぱりあの人は、神様なのかな…。

ぼんやりと思いにとながら、ベットに倒れる。

「信じて、もらえないのかな…」

馬鹿にされるのが恐くて、だれにも打ち明けた事が無くて1人で抱えていた。

神様と話ができるなんて、信じてもらえないと思っていたから。

神様って本当にいるのかな！。

わー！でも助けてもらってるのに、疑り深いよね、失礼だよね！

でも……だけと思えば返すと偶然が重なる…。

お父様が亡くなったあの日に声が聞こえたから。

信じてみたい、神様は…もしかしたら、死んでしまったお父様なのではないかって事を。

似ている、とっても似ている…喋り方とか、声とか。

弱い私を応援してくれているのかなって。

お父様が私を寂しくさせないようにしてくれるのではないかって。

やっぱり自己満足かもしれない、ただの願望かもしれない。

でも、もしそうだったら、嬉しいな。お父様とずっと繋がっていられるから。

* *

届いてきた一枚の手紙。それが私の運命を変えるなんて思いもしていなかった。

「音憂。音憂宛の手紙、来てたわよ」

ほえ？私に手紙なんて珍しいな。可愛い桜色の封筒だあ。

手紙開けるときってわくわくするな。ペリペリペリ…ひょいっ！あれ？

「何だよ、ラブレターか？」

精霊君！

「わー私のー」

ジャンプしながら取るうとするけど、ふうっ！取れない！精霊君、最近あまりに背が伸びてるからな！。

よし、こうなったら強行突破！

精霊君のわき腹にくっつく！そしてくすぐる！

ちよいちよいと邪魔そうにしています。効果ありでしょうか！

「はいはい、返しますって」

ふふふ。大成功です！さっそく開けてみますと・・・。

* 羽戸 音憂様 *

冬の寒さが厳しいこの頃、音憂様はどうお過ごしでしょうか？この度手紙をお送りした理由は、音憂様のお力を貸して頂きたいと

我が会社は考えております。

突然の申し出で申し訳ありませんが、近日改めて音憂様のご自宅へ

伺いたいと考えております。

我が会社は自然保護地球保護を大切にしております。

環境、人類、そして草、樹、花への奉仕をしてみませんか？

国にも認められており、安全な仕事を依頼しています。

音憂様の高魔力を社会にぜひ貢献して頂きませんか？

良いお返事を期待しております。

天華団体

「…天華団体？」
あまはな

私は呟いた。

「天華団体っていったら世界で活躍している組織よ！」

お母さんが言った。

「へー…そうなんだ」

でもこの内容って、どういう事？

「ちょっと見せて見せて」

お母さんが手紙を覗き込んだ。

「・・・」

「ねえ。お母さんこれってどういう意味なの？」

「音憂」

「？」

「あんだ、すごいじゃないー！！」

「へ？」

「天華団体なんて入りたくても入れない、トップクラスの組織なのよ！」

「はあ」

「お母さん小さい頃憧れてたのよ、華人様はなびとさまにー！何てったって華を愛し、世界中の自然を慈しむ姿！

世界中が騒がれていた、精霊から守ってくれる天使！強くて美しい

女性の憧れなのよー！」

「でも、それって…」

バンツ

ドアが大きく閉まった音が鳴った。

精霊君はばつ悪そうに部屋から出て行った。

「精霊君っ！」

私は精霊君を追いかけた。

天華団体は精霊を駆除する団体だから、精霊君が怒るのは当たり前
の事。

大丈夫だよ。私、天華団体になんて入らないから。

*

*

とんとん

精霊君の部屋のドアを叩く。

「あの…入っていいでしょうか」

しーん…

（むう、どうしよう）

ドアの前で立ち尽くす。

（入らない方がいいのかな……ううん！強行突破だ）

本音を話したら、精霊君だって分かってくれる！

ガチャツ

目の前に映る光景、思いもよらない姿。

いつもの精霊君とは思えない…。

机にうつ伏せになって、泣いている…？

「あの、」

「……」

「大丈夫だよ。私、天華団体になんて入らないよ」

「……」

「キミの敵になんてならないよ」

「・・・」

「ずっとキミの味方だから」

「…音憂」

「え…」

手を引つ張られて、精霊君にぶつかる…？

フワツ

精霊君の体の冷たさが伝わる。

震える体に抱きしめられて、冷たくて悲しい気持ちになる。

「…音憂も、俺を見捨てるのか？」

悲しい記憶を持つ君。とても辛かったよね。

でも、大丈夫だよ。

独りじゃないよ、私がずっと傍にいるから。

キミの背中に手を組んで抱きしめた。

ぎゅっと、いつまでも離れないように。強く強く抱きしめた。

「私、キミの事大好きだから、ずっと傍に居たいな」

2人を引き裂くあの出来事が起こるまで、ずっと私達は一緒だったね。

26・桜色の手紙（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

音憂ちゃん、彼と仲良くなっています（笑）

桜色の手紙が届きました。

音憂ちゃんの高魔力に気付いた天華団体が出した手紙なのですが、音憂ちゃんが高魔力になったのは、彼がくれた指輪のおかげなのでしたー。

（その指輪を身に付けると、身に付けた者の潜在能力が発揮されるからです）

音憂ちゃんは華人にはならないって言っていたのに、どうして華人になったのでしょうか？

神様が予言した事は、何だったのでしょうか？

それは次回起こります！

次回も宜しければ読んでみて下さい。^^

27・音が途絶える日（前書き）

今回は暗い話になっています。

残酷な描写とまではいかないかもしれませんが読む際には注意して下さい。

27・音が途絶える日

キミの声が聞こえる。

ずっとずっと、忘れられずに響いている。

「じゃ、俺行つてくんな」

精霊君は悲しそうに笑った。でも悲しんではいけない。

これは精霊君の望む事だから、私は精一杯応援するんだ。

「修行：頑張つてね」

口元を必死に上げて笑う。作り笑いに見えるだろうか、やっぱり。

「すぐ強くなつて帰ってくるから。お前も華人として立派になつて
るよ」

精霊君は強めの口調でそう言った。

「護衛士なら敬語で話すのではないのでしょうか？」
からかつて言ってみた。

「はいはい、すみませんね」

そして頭をなでられた。大きくて暖かい手。

手は離され、キミは遠くに旅立つ。

「…待つてるね」

でも、頼つてばかりじゃいけない。

だからね　いつか手放すんだよ

*　　*

一通の手紙。

キミの傍にいるよと約束してから、私達はずっと一緒だった。

精霊君は、子供みたいに私にひつついてきて何というか、可愛かつ

た。

でも、ずっと弱いままではいられない。

時は過ぎ、人は変わる。

人は変化を求める生き物だから。

「俺、このままじゃいけないよな……」

桜が咲く庭で彼は呟いた。

私は彼を見ながら話を聞いていた。

このままじゃいけない

そう、彼は変わろうとしていた。

厳しい過去が彼の心を捕らえようとしても、彼は自分から進もうと
していた。

私は彼が離れていってしまうのではないか、と思って心細かったけ
れど。

違かった。

最初の目的からズレていたんだ。

私は、彼を幸せにするための手伝いをするだけで、彼を幸せになん
てできない。

そんなのは、私のエゴだ。

私のわがままだ。

彼は、私なんていなくても生きていける。絶対に。

今、私を必要としてくれていても、それは意味が無い。

彼が独りでも生きていけるような強さを、彼自身から身に付けなく
てはいけないんだ。

「俺、前にも言ってたけど……修行に出かけてこようかと思ってる」

独りでも生きていける強さを彼もきつと望んでいる。

だから、応援しよう。

ずっと、ずっと。

私が朽ち果てるまで。

「うん：いいんじゃないかな」

「何かなげやりだな、お前」

キミは不機嫌そうな顔をした。

「そんなことないよ」

「本当か？」

じつと見つめる、瞳。

ガンバレ

私も、頑張るから

*

*

「華人になりたい」

私は宣言した。

理由は、彼を救いたかったから。

事の発端は少し前。

彼と一緒に居た時に始めて使ってみた。

未来を予知する力を。

軽はずみな気持ちで使ったのだけど、予想外の未来が待っていた。

精霊くんの未来。

でも、精霊君ではなかった。

完全に、精霊化していた。

暴れて力を爆発させていた。

そこに天使がたくさん来て、彼を止めていた。

どうしようもできない私がそこに立っていた。

今まで私は何していたのだろうと自分自身呆れていた。

そんな未来にはしたくない。

彼は人として生きてほしい。

精霊化を防ぐ事ができるのは、天華団体の天使だけ。

天使というのは、人と聖霊を混ぜて作る人工的なもの。

私は天華団体に入り、少しずつ知識を深めていった。

時は経ち、ついに精霊化を完全に食い止められる方法を知った。

天使の歌 という術。

天使自身の聖霊力を使い、精霊化と中和させるという方法。

私はその術を使えるようになるために、どんなこともした。

醜い事でも、どんな事でもした。

そんなある日、精霊君が修行から帰ってくると手紙が来た。

嬉しくて、どきどきが止まらなかった。

とても待ち遠しかった。

引き裂く出来事。

人の心を読み取れる花。

今度は、花と人を混ぜてつくる人工的な存在を作るという企画ができた。

私は元々人工天使は好きでは無くて、新しく作られる花人の存在はなひとを作り出して欲しくなかった。

でも、私は所詮下っ端の人間。口に出す事は許されなかった。

そして実験台が必要となった。

高魔力を持った人間…。

周りは私を見つめた。

そう、私が実験台として選ばれたのである。

私も抵抗した。

必死で生きようとした。

彼に殺されそうになった時は、あんなに死に恐怖を抱いていなかったのに。

違うか、きっと私はあの頃とは違って、欲張りになっていたんだ。

それに私はたくさんの人の叫び声を何度も聞いた。

同じ事だ。

私は最低な人間なんだ。

たくさん大事な事を忘れていた気がする。

もう、拾えない。

多すぎて拾えない。

もう、前には戻れないんだ。

また、私は失敗してしまったんだ。

汚すぎる、私は。

自分の幸せだけ考えていたから、こんな事になってしまったんだ。

音憂：音憂！

少女は振り返る。

「僕、音憂を守りたいから、僕は護衛士になるって決めた…決めました」

なにやら、馴れない言葉で話す少年。

少女は少年の言葉に目をまるくする。

「びっくりしたよ。…急に言葉遣いが変わって」

照れくさそうに少年は喋りだす。

「だって護衛士は主人に敬語で話すだろ？それに、ただでさえ音憂

は誇り高い華人になるんだから敬語の方がいいと思って」
少年の言葉に少女はくすつと笑う。

「あははっ。言葉遣いもどってるよ」

少女の言葉にカチンときたかのようにきつい口調になった。

「これから勉強すんだよ！」

その表情を見れて少女はほつとしたようだった。

「そっちの方がキミらしいよ」

にこつと笑って少女は言った。

遠い日の自分が綺麗に見えた。

「いやぁ・・・！やめてえ・・・っ！」

必死に生きようとした。

とても醜くて、悲しい姿。

自分でも愚かだと思った。

でも、もがいてももがいても痛みはやまない。

止まる事無い。

血が流れてくる。

刃物で傷つけられて。さくさくと痛みが走る。

痛い。

これが痛いということなんだ。

「やだ・・・いやあっ！」

力一杯叫んでも聞こえる事は無い。

ここは防音施設の実験所だから。

だれも助けには来ない。

痛い、痛い。

「・・・！」

血が止まらない。

紅に染まる。

すごい、すごいまつかだよ……。

* *
* *

紅い血、横たわる少女
何もできずに、されるがまま

「音憂！」

バンツ！！

どこいったんだよ、あいつ。

あの天華団体って所で何かあったんじゃないのか！？

俺が居ない間に何かあったのか……？

どこだ？天華団体の本拠地は……。

届かなかった想い、冷たい体。

何もかもが遅かった、時を戻すことはできない。

「……音憂？」

は……何が起こってんだよ。

何だよこれ？

は……はは。

あ、あ・・・

「音^ね憂^うっーっーっ！ーっわああーっ！」

時は戻らない、人が変化を望む限り。

27・音が途絶える日（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

これが音憂ちゃんの辛い過去です。

よく分からない存在　花人の実験台にされてしまいます。（この時は正確な名前が決まっていなかったなので花人です）

これから、彼視点に変わる…？と思います。

この話の最後は1話目に繋がります。

彼が記憶をなくして、草むらに横たわっているあの日にです。

その時に、華人となった音憂ちゃんと再開する事が出来ます。（彼は覚えていませんが…）

何故彼は記憶をなくしたのでしょうか。

宜しければ次回も見てください。^^

28・華人の想い

信じられない。信じる事なんて不可能だ。

目の前にある出来事に直視できない俺がいた。

冷たく紅く染まった音憂。

きつと、もう動かない。

もう笑わない、喋らない。

音憂は何処へ行っただろう。

「音憂・・・音憂」

起きるわけが無い。もう、2度と。

誰が、誰がこんな事を・・・。

ふざけんな、ふざけんなよ・・・！

俺は天華団体の実験室から抜け出して、音憂をこんなにした奴を探した。

ただ、がむしゃらに。

許せなかった。こいつを奪う事を。

怒りをそいつらに向けた。

許せない、もうどうにでもなれ。

こんな事して無駄だとしても、それでも俺はする。

許せないから、ただそれだけだ。

*

*

「我々の実験台に手を出さないで頂きたい」

白い白衣を着た、細い体つきの男が言った。

その表情はただ厳しく、冷酷だった。

男の前には、茶色の髪 of 少年が倒れていて、体中がぼろぼろだった。

「お前ら・・・ふざけんなよ」

低い唸った声で少年は言った。

少年の周りには薬が散らばっている、おそらく薬のせいで彼は動けないのだろう。

歯を食いしばりながら、少年は拳を握った。

こいつらが音憂を・・・

「ん・・・？君、よく見たら精霊化の人間か？」

少年は瞳に力をいれて睨んだ。

「・・・だからどうしたんだよ」

その返答に男は驚きを隠せない。

「精霊化した奴は、いつ暴走するか分からない。さっさと封印しなければ」

男は目で合図し、長い髪の女性は少年に近づいた。

澄んだ藍の髪で、背には翼を生やしていた。

彼女は人工天使だった。

目を瞑り、呪文を唱えると光が少年を包んだ。

「彼は・・・月の精霊に摂りつかれています」

「そうか、さっさと削除しなさい」

殺す事になにも罪悪感を感じないような態度。

「ですが・・・」

彼女は戸惑う、精霊とは言えども殺す事には躊躇いを隠せなかった。

「何だ？早くしろ」

彼女は深くため息をついた。

そして、眩い光は彼を締め付けるかのように細い糸となった。

キンツ

電波のような音が響いた。

「・・・っ」

彼は頭を手で押さえた。頭に音が響く。
高い超音波が鳴り続ける。

その時に彼の中の精霊が封印された。

同時に彼の記憶も封印された。

今、彼はただの人形になった。

* * *

・・・？　ここは何処？

桜色の髪の少女は診察台から起き上がった。

その少女に気付いたように、周りに白衣を着た女性が近づいた。

「華人：実験成功です」

周りに明るい雰囲気が漂う。

その雰囲気戸惑いを隠せない少女が呟いた。

「ここは何処？」

しかし、彼女の声に答える者は居なかった。

少女は様々な訓練を受けた。

華人としての力を試された。

彼女は実験台だった。

少女は時が過ぎても、少女のままだった。

年を取らずに生きていく。

半永久的に。

華人^{はなびと}という言葉が世界に広まった頃。

桜色の髪の少女は、自分の記憶を取り戻してきていた。

しかし、誰にも話さずに心に留めていただけだった。

話したら、また再検査をさせられると思ったからである。

日常のように診察を受けた後、少女はいつものように窓を眺めていた。

窓の向こうには桜が咲いている。

いつもどおり景色。

1年中咲く桜。人工的に作った桜だからだ。

しかし、今日はいつもと違う景色が映った。

蒼い綺麗な髪、さらさらと風に靡いている。

歌が聞こえる。

これは華人の歌だ。

今、華人は宗教化して、世界各地で歌われている。

「綺麗な声・・・」

少女は初めて心動かされた。

綺麗で、純粋な声に。

初めて少女は、彼女自身の意志で動き始めた。

28・華人の想い（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

彼視点少ない！出番少ない・・・。

今回は華人として生きている頃の音憂ちゃんです。

少しずつ音憂の頃の記憶を取り戻しています。

人の心が分かる花と音憂ちゃんを混合させた種族が華人なので、
人は人の心を読む事ができます。

そして、音憂ちゃんは永遠の少女です！

年をとらない設定です！

後、華人の実験はまだ音憂ちゃんしか成功されていません。
歌を聴いて心動かされる音憂ちゃん。

蒼い髪で、歌が上手いといえば・・・？

次回も宜しければ見てください。^^

29・藍色の音

綺麗な声・・・誰だろう。

音憂はベットから起き上がり、窓を覗き込んだ。

外からは蒼い空が浮かび上がっている。

音憂は裸足で窓に足をかけた。

ズルズルズルツ！

窓からすべり落ちてしまった。しかし、ここは1階なのでそれほど怪我はしないと思われるが・・・。

見事にぺたんとなつぶれている音憂をまじまじと見つめる少女。

「大丈夫？」

綺麗で澄んだ声だった。

音憂は顔を上げて、少女の顔を覗きこんだ。

さらさらの蒼い髪が風に揺れる。

「美人さん・・・」

音憂は思わず心の声が出てしまった。

「えっ・・・そんな事ないわよ」

少女の頬が少し赤みを増した。照れながら、少女は音憂に手を伸ばした。

「起き上がれる？」

こくと音憂は頷いた。

窓の外、辺りには芝生が広がっている。さらさらとした草の上に、2人は立った。

「あなたは、窓から出てきたみたいだけど・・・」

少し気まずそうに、藍依は呟いた。

そんな藍依をじっと見て、平然と答えた。

「うん、私実験台なの」

藍依は、はつとしたように目を見開くと、切なさそうに音憂を見た。

「実験台・・・そう」

藍依は目を落とした。

「歌・・・」

ぼそつと音憂は呟いた。

「聴かせて？」

突然のリクエストに困る藍依。

嬉しいけど・・・。ここは研究所よ・・・。あなたここからまた捕まっちゃうんじゃない？

ふいに音憂の腕に目がいった。

酷い傷・・・。実験台つてこういう事なんだ・・・。

「ここじゃあ、駄目っ！私について来て」

高らかに藍依は叫んだ。

思い切り走る藍依に必死について行こうとする音憂。

傷だらけの足を引きずって、走り出した。

「ここなら聴かせてくれるの？」

2人は広場のベンチに腰をかけた。

藍依は肩で息をしている。なぜなら、50m走のように思いつきり走ったからだ。

だが・・・

「すごい、ね」

音憂は平然としていた。まったく呼吸が乱れていない。何者なの・・・この子。

「別にすごくないと思う、普通、正常」

機械のように喋る、音憂を見て藍依は思った。

実験台・・・という事は。

もしかすると、この子が・・・？

「あなた、もしかしたら華人^{はなびと}？」
恐る恐る聞いてみた。

「うん」

「・・・」

思わず息を吞んでしまった。想像していた華人の姿とは違ったからである。

叫びたい衝動を我慢して、藍依は口をぱくぱくさせた。

「お願いします！華人様！」

藍依はベンチの上で土下座をした。

「？」

眉を寄せて、不思議がる音憂。

「私のママを助けてください！」

突然の頼みごとから始まった、音憂のミッション

「私のママは研究所で働いているの、けどね本当はこんなところにいたくないんだよ！ママは連れて行かれたの！ここに・・・っ」

半泣きの藍依を見て、音憂はふうと息をついた。

「分かった、助ける」

音憂はベンチから立ち上がった。くるっと振り返って藍依を見つめる。

「いつてくる」

「・・・あ」

音憂は目をキッと開いて研究所の方へ走り出した。

余計な詮索はしない。これが音憂のポリシー。

藍依は流れる涙を拭いて、呟いた。

「ありがとう華人様・・・っ」

窓からさつと侵入する音憂。かるやかな足取りで部屋に侵入する。

周りは騒がしい。

「何が起こったやら」

あなたがここから抜け出したからでしょう。

「華人！ここにいたのか」

さつそく見つかりました。さてどうする。

「・・・」

てこてこてこ…。

普通にスルーした。

はい！もちろん追いかけてきました

「待てえ！華人ー」

（待てと言われて待つ奴がいるのだろうか・・・）

ふうとため息をつく。

そして足を止めた。

えっ！本気で待つつもりですか！？

「ようし！捕まえた」

あらら、どうするのでしょうか。

「フエイント」

後ろから抱き付こうとする相手の腹に、肘で思いっきり衝撃を与えた！

（ぐっはぁー！　しかし逃がすものかぁ！）

音憂の肩を掴もうとする。

ぱちん

はじかれた…。

「今までずっと一緒にいたじゃないか・・・」

いやいや、ずっとじゃないだろう。

音憂はその声にまた足を止めたッ！

これはもしか、感動の場面！？

「覚えてない」

ひゅるる……。寒い北風が吹いた。（部屋の中なのに！？）

たたりりり〜ら　（絶望の曲を各自ご想像して下さい）

「いた」

358個目（？）の扉をぶっ壊した。どれだけ扉が多いんだこの研究所は・・・。

そしてどれだけぶっ壊しているんだ・・・。破壊神に相應しい。

目の前には、蒼い髪の女性がいた。

「華人：！どうしたのですか？」

震える声で話しかけた。

「過去透視、する」

キイイーン！

歯医者のような嫌な音が響いた！（嫌な音だ！）

音響の頭の中には動画が流れた。あまり映りはよくないが・・・。

その動画の中には、蒼い髪の小さな女の子がいた。

（このこは、あの子）

ふっと目を閉じた。

「あなたが、ママだ」

「？」

女性をお姫様抱っこして、連れ去った。

ミッシヨンコンプリート

「つれてきた」

藍依の母をベンチに座らせた。

「・・・藍依」

「ママっ」

ひしっ！感動場面、親子の再会。

「めでたし、めでたし」

勝手にオチをつけ、うんうんと頷く音響。

すたすたすた…。

音憂は何も言わずに去っていった。切り替え早ッ！

「わぁ！駄目ですよ！華人様」

藍依が呼び止めた。

「？」

「ぜひ、家に泊まって下さい！いいよね、ママ？」

「そうね、ぜひお礼をしたいわ」

音憂は無言のまま立ち尽くした。

「歌聴ける？」

藍依は満面の笑みをうかべた。

「もちろんですっ！」

これが音憂と藍依の再開のお話でした。ちゃんちゃん

29・藍色の音（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

今回は少しコメディーな感じで進めてみました。

最近暗かったので・・・。

とりあえずここから、彼に出会うまでを書き進めたいと思います。

たんとんとしている音憂ちゃんです。

実の所、抜け出そうとすればいつでも音憂ちゃんは研究所から抜け出せたのでした。

音憂ちゃんはまだ記憶を思い出していません。

どのタイミングで、思い出すのでしょうか？

宜しければ、次回も読んでください。^^

30・探しモノ・旅の行方

私は歩く、大切なものが見つかるまで。

幸せな何かが、確かにあったはずだから。

探し続ける、手がかりがなくても。

霧の向こうに、きっと何かがあると信じて。

私は歩き続ける。

音憂は研究所を抜け出し、藍依の家に居候させてもらっていた。

藍依の母は研究所で働らかされていたが、音憂の力によって強奪（?）してきたのだった。

「もうそんな道には歩みません。ごめんなさい華人様」

と心に決めた藍依の母は、今は違う仕事を探し働いている。

藍依の父は随分前に亡くなっており、藍依の母が研究所で働く前までは2人で暮らしていた。

研究所に監禁されていると言って良いほど、藍依の母は働かされていた。

華人が助けにくるまで、藍依はずっと一人で暮らしていたのだ。

独りで、孤独に暮らしていたに違いない。

しかし今は急展開な幸せが藍依に舞い込んでいた。

昔の寂しさを埋めるように・・・。

研究所の連中に気づかれないうちに遠くの村に引越しをして、のどかに暮らしている。

研究所の奴らは重要な逸材（華人）や能力優秀な部下（藍依の母）

を失い、大騒ぎになっている事だろう。

だから、何としても取り戻そうとしてくるに違いない。

そんな不安も抱えながらも、自然の多いこの村 フェリス で暮らしていた。

暖かい日差しが降り注ぐこの大地で、村の森に囲まれながら3人は小さな家に住んでいた。

たったった！

「華人様っ！あの、どちらに行かれるのですか？」

藍依は玄関まで走って来た。音響が何も話さずに出かけようとしているから心配になったのだ。

そんな藍依を見つめ迷惑そうな顔をする華人。

靴を履きながら目を逸らして言った。

「探し物があるんだ」

意味深な言葉に藍依は首を傾げる。

「私もついていっていいでしょうか？」

恩人の華人に、ずっと忠誠を誓おうと藍依は決めていた。

忠誠は心の中で決めていたが、華人が知ったら迷惑がるだろう。

「長い長い旅だ。そんな簡単なものじゃないんだ」

華人の背中を見ながら、藍依は肩を落とす。

「もう帰って来ないという事なのですね」

悲しそうに藍依は呟いた。

言いにくそうに、華人はため息まじりに答えた。

「……そうなるな」

その言葉に藍依は動揺を隠せない。

藍依はやっと掴む事ができた幸せが、崩れていくような恐怖を感じていた。

手足が震えて、涙が滲む。

「藍依のママと幸せにな」

華人は精一杯の笑顔で別れを告げた。きつと彼女もどこかで寂し

さを抱えているだろう。

しかし揺るぐことのない決心。

扉が開かれ、一步一步踏みしめるように歩いた。

淡々と歩く華人。

どこに向かうのか分からない。どこに行きたいのかも分からない。

「分からない事だらけだ……私は」

足の疲れが少しずつ溜まっていく。しかし、そんな事は気にしないかのように歩き続ける。

長い長い獣道を歩いて、ようやく着いた初めての街。

建物に溢れかえって、人が賑わっている。

初めて……初めての筈なのに。

見覚えがある？

音憂の口が勝手に動き出した。

「ここはぶどう酒で有名な街、シャワール。陽気な人達が多くて治安は良い。音楽好きな人が多く、楽器職人がここで勉強しにくる場所。そもそも木管楽器の材料に使うヴェルアという樹が多く生息して入手が比較的容易なので、楽器職人が集まる理由と言われる……」

……

誰？誰が教えてくれたのだろう。私は元々知っていたのか？それなら他の知識も知っている筈だ。

何故だ。何で懐かしいなんて思っている自分がいるんだ。私はずっとあの研究所で暮らしていた。

いや、そうか私の記憶だ。それ以前の記憶もあったんだ。つまり、ここは私の記憶に係している場所……。

くるくると思考が巡る。それと同時に体が動いていた。どこかに誰かがいたという確信をしていた。

街中を全速力で駆け巡り、迷わずに進んでいく。人とぶつかりそうになるところをすれすれにかわす。人込みに吞まれそうになりながらも、必死に向かっていく。

ここを右に曲がって、突き当りを左に……。

そう、その時は隣にあったんだ、大切な何かが。

私はそれを探したい。手放したくないんだ。

思い出したい、私の大切な何かを。

お店だ。お店に来たんだ。

何かを買う為？……いや違う。でも何か大切なモノを手に入れたんだ。

何だ、それは。

小さくて、可愛くて、輝きに満ちているモノ……。

ここの奥の大きなお店だったはず。

小さなわき道を通り、たどり着く。

思い出の場所に。

たん……っ

走り続けた足を止めた。

疲れて、呼吸が乱れる。目の前がかすんでゆがむ……。

酸素が不足しているせいか荒い息をする。倒れそうな程、目眩がするが、重たい頭を上げる。

ここに何かの手掛かりがある筈だから……。

期待と高揚感で胸が高鳴る。

ゆっくりゆっくりと顔を上げた。

「・・・・・・・・」

目の前の景色に呆然とする。

体が硬直し、思わず息を呑んだ。

確かにここにあったはずの大きくてお洒落なお店。今はもう、ガラクタみたいに壊れかけていた。

今はもう前のような店の明るい光は消え失せている。

静まり返った場所。何かが終わった場所。

絶望の終焉。

「……つぶれてしまっていたのか」

急に力が抜けて、頭から前に斜めって倒れた。

ゆっくり、ゆっくりと。力尽きていく……。

ドスン……

重たい音が響く。

最後の支えを失ったとき、人はどうなるのだろう。

寒い気温の中、しんしんと雪が降り始めた。

小さく白い雪。涙みたいに、冷たく悲しい雪。

少女を慰めるかのように少女を雪が覆う。

熱を奪い、天に連れて行こうとしているのだろうか。

支えがないのなら、倒れるしかない。

自分で立てる力が無いのなら。

またいつか、起き上がれることを祈って。

願い続けるしかない。

冷たい世界で、少女はゆっくり瞳を閉じた。

30・探しモノ・旅の行方（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

音憂ちゃん！大丈夫か！？おーい！

これはピンチです。

誰かが、音憂ちゃんの支えになってくれるのでしょうか・・・？
藍依ちゃんはお母さんと一緒に暮らすことを夢見ていましたから、
ここには来ないのではないでしょうか。

・・・かといって彼はきつと研究所で袋叩きにされているでしょう
し（笑）殺されてもおかしくないしなあ・・・彼はどうなっている
のでしょうか。

そんな感じの内容をお送りします。^^

次回も宜しければ読んでみてください！

終話・永遠の命

意識が崩れていく中で、歌だけが聴こえて来た。
優しい歌声、雪も溶かしてしまっそうな……歌。

心も冷え切った先には、何も残っていないんだ。
ある筈と思っていた大切な物も、失っていた。
もう、無いんだ。

いくら探してもある訳が無い。
だって……この世界には存在しないのだから。

大切な人、獅樹君。

思い出したよ、キミの事。

ずっと守ってあげたかった人、精霊になった君。

キミ1人から、2人も大事な人を失ってしまったね。
心がぽっかり空いたみたいなんだよ。

精霊くんは研究所に来て、私を助けてくれたんだね……ありがとう。
う。

でも、それでキミを失う事はもっと辛かったよ。
体を傷つけられた時より、痛いよ。傷……深いんだよ。

さよなら精霊くん。

そして又、新しいキミが生まれるんだね。
何も無い、記憶の無いキミが。

それでも私はキミに尽くしたい。幸せになって欲しい。
もうワガママになっている、私。

止められない、命果てるまでキミの為に生きてくよ。

また会おう、キミに。

「華人様っ！」

寒い空気を遮るように高い声が響いた。

華人の瞳に映るのは、蒼い綺麗な髪・・・藍依だった。

「何で、ここに……？」

かすれた声を華人は出した。

本当なら、藍依の母と2人で村に住んでいた筈だ。

ずっと夢だった、家族と平和に暮らせる時間。藍依はずっと憧れていた・・・。

華人の問いに藍依はにこつと微笑みを浮かべた。

「あなたに忠誠を誓うと決めたのです。だから私は、あなたにどこまでもついていきます」

雪が2人を包む。

涙を浮かべる華人を、藍依が抱きしめる。

何もかも失っていた事に気付いた音響には、藍依は大切な支えだった。

藍依は支えた。折れそうな華の茎を。

やがて華は綺麗に咲き誇るだろう。

幸せな結末にさせるために。

温かい部屋、ほんわりと2人を包む。

街で宿屋を探し、そこに泊まった。

小さな部屋で、2人は抱きしめあいながら布団にくるまった。

音憂は心の秘密を藍依に打ち明けた。

自分が特殊な能力を使えること、音憂として生きていた時の事を。

藍依は頷きながら耳を傾け、自分より小さな体が想像以上の重い

困難にあっていた事を知った。

「音憂様……もう大丈夫ですよ。藍依がずっと一緒にいますから」
体から振り絞るような声で、話しかけた。

音憂は、その言葉を聞きゆっくり頷いた。

そして、藍依の顔をじっと見つめて

「藍ちゃんって呼んでも良い？」と言った。

藍依は「もちろんです！」と言って嬉しそうに、はしゃいだ。

絆は深まる。

この2人の間で、ずっと続いていった硬い絆……離れる事の無い、想い。

しかし、この絆が音憂の心を屈折させていった。

ずっとキミの傍に居たかった。

キミが私を忘れていても……。それでも良かった。

でも本当に……良いの？

私より、藍ちゃんの方がキミの傍に居たほうが良いのかもしれない。
い。

だって私の所為でキミは苦しんでいたから……。

私もキミだけに尽くすって、馬鹿みたいだね。

異常だよ、私……。ただキミに寄生している害虫みたいだ。

そうだよ、私だけじゃないんだ。

キミと歩んでいく人は。

ガタツ・・・ドゴンツ！

扉が壊れる音が響いた。

そして今、中央をくり抜かれた壁がある。

「よし……と」

何が『よし』なのかは置いて。

蒼く長い髪の女性がするりとぼろぼろの壁の中を潜り抜けた。

「ここにいるでしょ！少年！」

体育系な教師のような声が響いた。

その声の持ち主はズバリ藍依の母だった！

そう、ここは研究所。嘗て藍依の母が働いていた場所。

「あなたの事は悪い事したと思っていたのよ。今回助けてあげるから許して」

悪戯っぽい表情を浮かべながら、少年のあちらこちらに巻かれて
いる鎖を外す。

ボキヤ！ジャララツ！

ちなみに今は魔法不使用で、素手で行われています

つまり、藍依の母は怪力です。要注意人物ですね。

「おーい少年！起きて……って魔法かけられてるのか。しょうがないなあ……」

ズドオオン！

睡眠解除魔法をかけるのかと思っていたら今、柔道技かけました
ね。

どこで習ったのでしょうか。

「ZZZZ」

彼は寝ていますね、さすが。

記憶を失ってしまった時から彼は変人だったのですね。

ジリリリリイイイ！

警報が鳴り響いた！今の音で侵入者がいると気付いたらしい。ま
あ当たり前です。

「あっちゃあ……」

藍依の母、困っており、くるくると思考を巡らせます。

すると、自分のサイフを彼のポケットに忍び込ませました！

ちなみに大金が入っているサイフです。

彼もお金は持っていたのですが、修行の時に使っていたと思われる異国の通貨が入っております。

でも、サイフを入れてどうするのでしょうか？

「いちかばちかッ！」

バシュツッ！

彼を、何処かへぶっ飛ばしました！

レポート魔法です、上級魔法！

さすがは藍依の母！研究所に雇われただけある……ってあいつどこいったああ！

「彼が飛ばされた場所が、この世界でありますように……」

ええええええ！しかも他の惑星の場合あるんですか！？

「お前！何者だ！」

ようやく敵もこの場所に辿りついたようです！

「じゃ、私も退散します」

シュンツッ

こうやって彼は飛ばされたのであった……。

キミの事は全て分かる。

私には与えられた力があるから。

私は全ての力を使い、彼と藍依ちゃんが結ばれるようにした。時には、心を惑わせる力を使いながら。

結果オーライだよね。

2人は幸せになった……よね？

少女は大きな樹にもたれかかる様に座っていた。その樹の周りには一面に芝生が広がっており、蝶が飛び交っていた。その場所は、天国のように優しい光が満ちていた。

樹には綺麗な花が咲き乱れており、空は透明な青だった。

「もう、ここまでの記憶だけでいいの？」

昔の記憶は鳴り止んだ。はつきり言うと言を思い出す事はとても辛い、これが死者への罰なのだろうけど。

私は振り返って、何かを見た。

すると予想通り、1つの存在がそこに居た。

どこかで見た事のある姿だと思い、目を凝らす。

「お前は後悔してないのか？」

今更、何でそんな質問するのだろう。暗い影のような、輝く光のような何だかよく分からない存在だった。

「もちろんです。この結末は、私自信よく考えて出しました」

はつきりと私は答えた。

「そうか、それなら構わない。やり直す事ができても、お前はこの結末を選ぶのだな」

その存在の言葉は、私を諭すように優しく響いた。

やり直す事ができたら、私は又この結末を選ぶ……？

「……」

泣きたくなって、言葉が出なかった。

今でもこの結果が最善なんて、自信もない。

もっと違う道があったのかもしれないって、昔の私を見て思った。もっとこうしたらって、もっとこうできたらって、数え切れない程浮かんでくる。

溢れる、涙。

それは後悔からの涙。

「分かりません……でも、やっぱりキリがないと思っんです」
私は照れくさくて、恥ずかしくなった。

でも、その存在は理解してくれたように笑った。

「そうか、やっぱりまだ後悔してるのか」

意味深な言葉。まだって……？

「私、もしかして……何度もやり直してるの？」

音憂としての人生を……。繰り返していた？

「君が求める限り何度でもやり直そう。そして、いつでも君に力を与えよう」

あなたは、私に力を与えてくれた、あの人……ですか？

「そうだよ、音憂」

あなたは、お父様なのですか？

「私は、『この世界に生まれる全ての魂の父親』といっても良いかもしれないな」

えへへ……っ。それじゃあ、あなたは神様ですね。

「それは分からないな？」

とぼけるのも上手ですね……。

神様は私にチャンスをくれた。何度も何度も。
でも、生きている時は忘れているから、守られている事を忘れて

しまう。

でも心配しないでいいんだよね、生きる事に。怯えなくて良いんだよね……。

だから堂々と生きていこう。私らしい生き方を探して。

後戻りも、先に進む事も私達はある、精神の成長段階によって。

何度でもやり直しができるのだから、何も無駄にならない。

何度も繰り返し、学んでいこう。

この世界で、いつまでも……。

ねえ、聴こえるかな……？

本当はね、2人を見て羨ましいって思ったんだ。
そして痛くて、悲しくて、寂しい思いもした。

もっと生きれば良かったな……って後悔しちゃった。

でも私は笑うんだ。

2人に会ったのがとても幸せだったから。
泣かないって決めたんだよ。

悲しみと寂しさは涙にせず心の底へ。

あなたが今幸せなら、それが私の幸せになるから。

私は今日も笑顔になれるのです。

終話・永遠の命（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

ついに完結致しました。

ぐだぐだな文で真に申し訳ありませんでした。

読んで頂けた読者様には感謝の嵐（？）です……。

音憂ちゃんが最後に出した結論は、作者がこんな世界だったらいいなと思う希望です。

もしこのような世界だったら、躊躇わず、迷わずに自分の思う最善の生き方に、全力を尽くせる気がするからです。

何やらお話にもなっていない話なのですが、『華の天使 月の精霊』番外編を2作書こうと思います。

藍依編と音憂編です。

何度でもやり直せるなら、こんな結末もあつた筈というお話です。

外編・蒼い月

小さな村に2人は住んでいた。

大きな森に囲まれた小さな村。今、2人は村の脇にある、少し傾斜がある坂道を上っている。

鳥が鳴く声しか聞こえない静かな森の中。

耳を澄ますと森が風に揺れる音が聞こえる。

平和な時の中をゆつくりと過ごしている青年と少女。

青年は鴉の羽のような黒い髪で、端正な顔立ちをしている。

物腰が柔らかなのに、どこか棘のような強さを隠し持つてるように見える。

その青年の隣に居るのは、蒼い髪の少女。さらつとした髪を風に靡かせている。

少女は隣に彼が居る事に、溢れるばかりの幸せをかみしめている。風がさつと吹き渡る森の小道を2人は散歩していた。

「……梓月は幸せ？」

急に声色を変え、ふと切なげな表情を浮かべる少女。

その言葉に疑問を浮かべ、少女の髪をじつと見つめた。

「あ？ 何でそんな事言うんだよ」

照れくさそうに、困った顔で言った。

「だって、梓月ばーっとしてるから……私の話しまらないかなって」

心の不安が増殖していく気がして、思いを打ち明けた少女 藍依。

自分と居てつまらないのかと不安で堪らない。

「つまらない訳ねえーって……可愛い藍依ちゃんと一緒に入れて幸せだって」

少し冗談まじりに慰めるような口調で言う彼 梓月。
そして、藍依の小さな肩にぎゅっと後ろから抱きしめた。

「……」

梓月は不思議に思った。

いつもなら抱きしめると固まる藍依が、今は特に反応が無い。

「あの子の事忘れられないの……？」

その言葉は彼の心に、ぴしっと亀裂が入ったようだった。
藍依に掛けた腕を、片方ずつ離れた。

「……」

俺って分かり易いのか……？

そっだ、藍依の言う通り何か不に落ちない事があるんだ。
何度も夢に出る、アイツ。

見覚えのある少女。

ずっと傍に居てくれた気がしてならない。

藍依もそんな感じの少女と一緒に居た気がすると言っていた。
俺達と何か関わりのある少女。

その少女が何度も夢に、現れる。

桜色の大きな花が、あちらこちらに咲き乱れる場所に俺は居る。前にはあの少女が居て、肩までの桜色の髪を揺らしながら歩いている。

後ろには藍依が待っているのに、前に進んで行く少女を眺める俺、どうしてもそっちに気を取られ、食い付くように見入ってしまう。俺は追いかける。……藍依を置いて。

少女の肩に触れようと手を近づける。

でも感触が無い、つまり触れない。

でもそんな俺に気がついて、くるっと振り迎えり、にこっと頬を染めながら笑う少女。

『藍ちゃんと、お幸せに……』

その少女が忘れられない、今でも。

でも、確かな想いがある……それは、藍依を大切に思う気持ち。

一見筋が通ってないように思えるけど、俺の中では藍依への気持ちに断然占めている。

藍依ってすっげー可愛いんだ。

出会った時は冷たそうな印象に、少し近寄りがたかった。けど、すぐに分かった。

藍依は人と接するのが苦手なただだって事に。

だから俺、藍依の事笑わせようと色々した。

すっげーつまんねえ事でも笑ってくれるんだよな、藍依って。

つか、多分普通な奴と笑いのツボが違うな。変な所で笑うしな、藍依は。

優しい奴なんだ……藍依は。

それですっげー友達想いで……。

あ？ 友達？

あいつに友達なんて居たか？

……まあ、いつか。その友達をすっげー尊敬しててさ、何があっても守って行く！ って所が格好良いんだよなあ！

これはギャップで、すげー俺的にヒットしたな。

うん、可愛い。藍依は、すげー可愛い。

よし、俺の心の整理、終了！

「俺が好きなのは藍依だから」

藍依の背中に向けて、彼は話しかけた。

彼は照れる様子も無く、大きな声で言った。

その言葉を聞いて、藍依はふるふると震えだし、振り返った。

「安心して……良いの？」

柔らかい涙。

彼を想い、流す涙。

そんな藍依を見て、想いが溢れる彼。

自分の為に泣いてくれる。

一緒に居ないと寂しいって言って、1つ1つの態度に、心が離れて行っていないかと悩んでくれる。

全て、自分を愛してくれている証拠。

「ああ！ 死ぬまで安心していいぞ！ 約束だ」

俺達は約束した。

藍依がこれで安心してくれるなら、どんな約束でもするから。本当に藍依が大切だからさ。

又、数日後に夢を見た。

……そっか、アイツは俺達の恋の天使だったんじゃないのか。

華に埋もれる天使に出会った。

よく顔をみると、やっぱり綺麗で可愛らしかった。

「夢で会ったびに、君を見ていた」

俺は、心の……ずっとわだかま蟠っていた想いを打ち明けた。

決別の意味も含めて。

俺の言葉に特に反応せずに、彼女は周りに咲き乱れる華を見つめていた。

「堕ちたの……失ったの」

ぼそぼそと彼女は話し掛けた、いや話すと言うより自分に語りかけたという表現の方が近いだろう。

「何を……失ったんですか？」

変に敬語を使ってしまう。

緊張の所為か、喉が渴いて言葉にならない。

「翼……私の大事な片翼。やがて私は堕ちる、この深い海へ」

彼女はそう言って、下を指差した。

確かにそこには、蒼い海があった。堕ちたら、もうここへは戻れないだろう。

「君は天使だ。そして綺麗な華のように、惹き付けられる魅力がある」

「華……天使？」

「ああ、華の天使だ。だから飛べるよ、君は」

「飛べない……私はもう」

「君は誇り高い『華』だから。僕の憧れだったから、下を見ないで……空を見上げて欲しかった」

俺は夢の中だからか、支離滅裂な言葉を口にしていた。

彼女の事を何でも知っているような、そんな言葉が次々に浮かぶ。

「遠い遠い、綺麗な蒼い空にキミの目指すものが絶対あるから……」

俺は、上に広がる蒼い空を指差した。

彼女は飛べる、未知が広がるこの世界に。

彼女は手を差し伸べた。彼女から手を差し伸べるのは夢の中で、初めてだった。

でも、それはできない。

確かに応援したい、彼女を。

俺は、君と一緒に飛べない。

……できない、俺には……藍依がいるから。

俺は首を振った。

そして彼女は悲しげに、差し伸べた手を下ろした。

「……うつん、違うよ。キミだけ……君だけがいればいいの」

外編・蒼い月（後書き）

お読み下さってありがとうございます！

今回は藍依ちゃん編です。

今までの展開なら、このように終わっていたというお話です。
最後のセリフに聞き覚えのある方がいたら、感激です！実は、1話
の最初で使った言葉です。

華の天使は独りでも飛び立つ事は出来るでしょう。
海に溺れないで頑張れ、音憂ちゃん。

外編 闇の向こう

俺は、上に広がる蒼い空を指差した。

彼女は飛べる、未知が広がるこの世界に。

綺麗に空に舞うだろう、華のように。

天使は、恐る恐る手を差し伸べた。

彼女から手を差し伸べるのは、初めてだった。

手が微かに震えている。俺に手をはじかれないかと不安なのだろうか。

でも、俺が手を差し伸ばすという事は……。

様々な思考が頭を駆け巡る。

湧き上がる感情を理性が抑えようとする。

いつもそうだ。

俺はいつも頭で行動しようとする。

感情を抑圧させて……忘れたフリして。

何もかも中途半端なんだ。

パシンッ

俺は天使の手を掴んだ。もう、何もかも抑えきれなかった。

「え……どうして」

少女は戸惑いながら、俺を見つめた。

俺も、じっと少女を見つめた。あどけない表情、綺麗な瞳。

彼女との記憶が頭の中過ぎ_よった。

ずっと一緒に居てくれた、大切な存在。

笑顔に何度救われただろう。

キミをずっと守っていきたくと思ったんだ。

「うあ、獅樹くんっ！ おはよー」

元気で明るくて、眩しくて。俺にとっての光だった。

どんな俺でも支えてくれていた、女の子。

俺がいくら憎んでも、許して愛してくれた。

「精霊君……私はずっとキミの味方だよ」

ずっと俺だけを見て、俺の幸せだけを考えてくれていた。

俺が何度も君を忘れてしまっても、笑顔で会いに来てくれた。
精霊化している俺でも、差別せずに俺自信を見てくれていた。

2つの存在は同一。

空にな_{から}った俺に惜しみなく振り注いでくれた。

キミがいたから、今の俺がいるんだ。

「音憂……もうお前を放さないから。ずっと待たせてゴメン……」

俺は彼女を抱きしめた。音憂の体温が俺にも伝わる。

音憂の温もりを感じる。鼓動も聞こえそうなくらい、ぴったりと
体がくっ付いている。

これが音憂なんだ。

やっと会えた、俺と音憂。

惑わされずに進む、この感情。

音憂は安心したのか、俺の胸に頭を埋めた。どっしりと胸に重さが掛かる。

桜色の髪が俺の頬に当たる。花の良い香りがした。
何か妙に音憂が愛しくて、体中の熱が湧き上がった。

「……もう、飛ばなくて良いの？ 飛ばなかったら、もう……華の天使じゃなくなってしまう」

彼女は泣いていた。

天使のままでいたい気持ちと、飛びたくない気持ちが混ざって、何をしたら良いかが分からなくなってしまうているのだろう。

何でそんなに天使でいたいんだよ。
無理してまで、飛ばうとすんだよ。

「俺がお前を『華の天使』って言ったからか？」

俺は囁くように耳元で言った。
すると音憂はこくりと頷いた。

「キミが私に付けたくれた名前だから、大切な名前だから。私、天使でいたいって思った。キミが綺麗って言うてくれてから……私まだ飛んでいきたいの、天使でいたい……！」

……馬鹿。

なんだよ、そんな事まだ気にしてんのかよ。
そんなの俺が、勝手に決めた呼び名だけであってさ。

……俺の戯言、覚えてたのかよ。

華の天使になりたいって思ってたのかよ。

俺が懂れてたって言ったからか……？

目についたのは、ぼろぼろになった彼女の翼。

……もう、休めよ。

悪かったよ、勝手に「お前にはこの世界を飛び回る可能性がある」
って言って。

人事って思ってたんだ。

だから頑張れっていったのかもしれない。

それに、折れた翼で無理に飛んだら、堕ちるだろ。

俺は下を見た。

深い深い闇に似た海がそこに存在していた。

そこに堕ちる可能性もあるのに、飛び立つ勇氣がよくあるな……。
見るだけで足が竦^{すく}む。

出会った時、音憂は俺に手を差し伸べた。

それは、俺と一緒に飛べると思ったからだっただのか？

俺といったら、頑張れると思ったからなのか？

勝手に自惚れてしまう。

でもそんな事恥ずくて、本人に聞けない。

だから俺が言う。

彼女が少しでも安心できるのなら。

「お前は天使じゃないから、飛ばなくていいんだ」

震える肩を強く抱き寄せた。

もう、逃がさない、放さない。

「俺の華だ。だから一緒に居てくれ、俺の傍に」

捕らえるように音憂の瞳を見つめる。

彼女は一瞬戸惑ってから、笑って、頷いた。

音憂の頬を流れ落ちる涙を、俺は指で拭った。
そして背中をとんとんと叩く。

「ホント泣き虫だな、音憂は」

俺の声に反応するかのように、顔を見上げた。
そして探るように、俺を睨んだ。

な、なんだよ……。

「君は、獅樹君？ 精霊君？ 梓月君？」

急かすように聞いてくる。

体を揺らしながら、俺の事も揺らしてくる。

ぐらんぐらん……

そんな強く揺すんなよ、興奮しすぎだろ……。

「誰だったら良いんだよ？」

俺はちよつとむつとしたように答えた。

だって、俺がどいつか分かったら嫌いになったりするんのかって。
音憂は誰が好きなんだよ……。

「みーんな好きだよ」

音憂は満面の笑みで答えた。

……っつーか心ん中読むなって！

誰が好きだったってま、どれも俺なんだけど。

「キミって月みたいだね」

音憂がにこにこしながら言ってきた。

は？ 月っすか。

まあ、俺、月の精霊に取り憑かれた時もあるけどな。結局音憂が直してくれたんだけど、ふっーの人間に。

「月が満ち欠けすると、同じ月とは思えない程変化するよね？
キミも別人みたいに性格が変わるから、月みたい！」

きゃきゃつと面白そうに笑ってる。

俺が多重人格な訳じゃなくて、精霊化の影響で記憶がちよくちよく無くなってるだけだし。

性格変わっても仕方なくね？

音憂は良いとえが出来たと思って満足そうだった。
ま、音憂が幸せそうだからいいとすつか。

「音憂、俺となら何でも頑張れるか？」

「へ？ どうしたの急に……」

「いいから答えろって」

「うん。頑張れるよ、何だって。キミが居るなら」

マジに言われると照れる。

「なら、飛ばなくて良いじゃん」

「え？」

「お前、そんな翼じゃ飛べないだろ？ それに俺には翼は無い、お前に頼ってしか空に行けないんだ。そんなん嫌だかな」

「……」

「なら海に行こう」

「え……！ それは」

「大丈夫だろ、俺が居るなら」

「……うん、うん。一緒に、ずっと一緒に？」

覗きこむように俺を見る。

「ああ、一緒だ。ずっと」

海の上に俺達は居た。

俺達が立っている場所は薄い霧。雲といって良い場所だ。時は経ち、やがて雲は破れる。人が死を迎えるように。

「ここだったら、死を恐れて一生過ごす事になる。そんなのつまんねえじゃん。だったら海に行こう。海で泳いだら、いつか島が見つかって、安心して過ごせる場所もあるかもしれないだろ？」

「……怖いけど、大丈夫。キミが居るなら」

涙目で必死の笑顔を作ってくれた。

そんな音憂を抱き寄せる。

背中をとんとんと叩く。

「お前ホント泣き虫だな。……でもすっげー頑張り屋だよな」

震える肩をぎゅっと抱き寄せて、「大丈夫だよ」と呟いた。

音憂を抱いて、足元の雲から飛び降りた。

少しずつ海に近づく。

真っ黒な闇に似た海。

もう、恐れない。音憂がいるなら頑張れるから、俺。

だから俺の傍に居てくれ。

それだけで充分なんだ。

安心して過ごせる俺達の居場所を探しに行こう。

ゆっくりと堕ちて、海が近づく。

深い深い闇に。

俺達の旅は始まる。

俺達は闇という名の海に、足をつけた。

外編 闇の向こう（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

ここまで書いてこれたのは、読者様が居て下さったからです。こんな話ですが、読んで下さって心から感謝しています。

最後は夢のような話で終わりにしました。

こちらは音憂ちゃんエンドです。

海の向こうになにがあるのかは分かりません。

大地があるかもしれませんし、闇みたいな海で、吸い込まれてしまいかもしれません。

それでも、誰かと一緒に恐れずに進んで行く事できるのではないかと思います。（そんな勇気があれば素敵だなと）

このお話は、夢の世界での物語です。

それは、彼と音憂ちゃんが一緒に見ている夢かもしれませんし、音憂ちゃんが1人で見ている夢（只の空想）なのかもしれません。でもそれでしたら寂しいですね。

私が伝えたかったのは、見返りを求めない愛です。拙い文章で誰にも伝わらなかったかもしれませんが。

ですが音憂ちゃんは、彼が自分を守ってくれるから、自分を愛してくれるから、彼を好きになった訳じゃないと言う事です。

中々出来るものではないと思います。

そんなテーマで書いたのに、ハッピーエンドで終わらせたくは無かったのです。（バットエンドとも限りませんが……）

なので、少し切なさが残りそうな終わり方で外編を書きました。2人の旅はどうなるのでしょうか。

でも2人にとって、一緒に居るだけで幸せなのだから、絶対ハッピーエンドになりますね（笑）

読んで下さって、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4931f/>

華の天使 月の精霊

2010年10月8日22時06分発行